

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 (23)

県営特殊農地保全整備事業 (横尾下地区) に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

上 田 屋 敷 遺 跡

1993年3月

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会

序 文

本町は埋蔵文化財包蔵地が多く、前川・安楽川の流域を中心に約200ヶ所の周知の遺跡が知られております。

近年、宅地開発や農業基盤整備事業の増加に伴い、これらの遺跡の緊急確認調査も又急増しています。

今回調査しました上田屋敷遺跡の発掘調査も県営特殊農地保全整備事業横尾下地区の実施に先立って行われたものです。

ここにその調査結果を報告書として刊行いたしますが、この資料が歴史解明の一助となり、文化財の保護と学術研究のために広く活用されれば幸いです。

発刊にあたり、発掘を担当された各調査員はじめ指導者、作業協力者の皆様、又調査に御協力を頂きました土地所有者・並びに関係各位に対し、心よりお礼申し上げます。

平成5年3月

志布志町教育委員会

例 言

1. この報告書は県営特殊農地保全整備事業（横尾下地区）に伴う上田屋敷遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、鹿児島県農政部（大隅耕地事務所）からの委託事業として志布志町（志布志町教育委員会）が受託し調査主体者となり、平成4年10月22日から平成4年12月3日まで実施した。
3. 調査における実測および測量、写真撮影は、米元と小村が分担して行った。
4. 調査および整理作業については鹿児島県教育委員会文化課及び埋蔵文化財センターの指導、教示を受けた。
5. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
6. 挿図番号100が二重になったため100'としている。
7. 出土遺物は志布志町教育委員会で保管し、公開・展示する予定である。
8. 本書の執筆および編集は米元、小村が行った。

目 次

序 文
例 言
目 次

| | |
|--------------------|----|
| 第I章 調査の経過 | 6 |
| 第1節 調査に至るまでの経過 | 6 |
| 第2節 調査の組織 | 6 |
| 第3節 調査の経過 | 7 |
| 第II章 遺跡の位置・環境と周辺遺跡 | 9 |
| 第1節 遺跡の位置・環境 | 9 |
| 第2節 周辺遺跡 | 10 |
| 第III章 層位 | 13 |
| 第IV章 調査の概要 | 14 |
| 第1節 調査の概要 | 14 |
| 第2節 各試掘トレンチの調査 | 15 |
| 第3節 層位 | 19 |
| 第4節 VI層の調査 | 19 |
| 第5節 III層の調査 | 19 |
| 第V章 まとめにかえて | 60 |
| あとがき | 77 |

表 目 次

| | |
|--------------|----|
| 第1表 周辺の遺跡一覧表 | 11 |
|--------------|----|

挿 図 目 次

| | |
|----------------------|----|
| 第1図 上田屋敷遺跡周辺の遺跡 | 12 |
| 第2図 上田屋敷遺跡土層模式柱状図 | 13 |
| 第3図 上田屋敷遺跡1～4トレンチ断面図 | 14 |

| | | |
|------|-----------------------|----|
| 第4図 | 5トレンチ断面図及び平面図 | 15 |
| 第5図 | 第1号畦畔断面図 | 16 |
| 第6図 | 第2号畦畔断面図 | 16 |
| 第7図 | 第3号畦畔断面図 | 16 |
| 第8図 | 第4号畦畔断面図 | 17 |
| 第9図 | トレンチ・グリッド配置及び調査区域図 | 18 |
| 第10図 | Ⅴ層遺物出土状況・ピット位置図 | 20 |
| 第11図 | 出土遺物実測図 | 21 |
| 第12図 | 上田屋敷遺跡遺物出土状況・第1号土壌実測図 | 22 |
| 第13図 | Ⅲ層遺物出土状況・土壌位置図 | 23 |
| 第14図 | 第2号土壌実測図 | 27 |
| 第15図 | 出土土器実測図(1) | 28 |
| 第16図 | 出土土器実測図(2) | 29 |
| 第17図 | 出土土器実測図(3) | 31 |
| 第18図 | 出土土器実測図(4) | 32 |
| 第19図 | 出土土器実測図(5) | 33 |
| 第20図 | 出土土器実測図(6) | 35 |
| 第21図 | 出土土器実測図(7) | 36 |
| 第22図 | 出土土器実測図(8) | 37 |
| 第23図 | 出土土器実測図(9) | 39 |
| 第24図 | 出土土器実測図(10) | 40 |
| 第25図 | 出土土器実測図(11) | 41 |
| 第26図 | 出土土器実測図(12) | 42 |
| 第27図 | 出土土器実測図(13) | 43 |
| 第28図 | 出土土器実測図(14) | 45 |
| 第29図 | 出土土器実測図(15) | 46 |
| 第30図 | 出土土器実測図(16) | 47 |
| 第31図 | 出土土器実測図(17) | 48 |
| 第32図 | 出土土器実測図(18) | 49 |
| 第33図 | 出土土器実測図(19) | 50 |
| 第34図 | 出土土器実測図(20) | 51 |
| 第35図 | 出土土器実測図(21) | 52 |
| 第36図 | 出土土器実測図(22) | 54 |
| 第37図 | 出土土器実測図(23) | 55 |
| 第38図 | 出土土器実測図(1) | 57 |

| | | |
|------|------------|----|
| 第39回 | 出土石器実測図(2) | 58 |
| 第40回 | 出土石器実測図(3) | 59 |

図 版 目 次

| | | |
|-------|-------------------------|----|
| 図版 1 | 調査風景、試掘トレンチ断面・完掘状況、畦畔断面 | 61 |
| 図版 2 | 畦畔断面、完掘状況、遺物出土状況 | 62 |
| 図版 3 | 遺物出土状況、土壌出土・完掘状況 | 63 |
| 図版 4 | 出土遺物(1~19) | 64 |
| 図版 5 | 出土遺物(20~32) | 65 |
| 図版 6 | 出土遺物(33~37) | 66 |
| 図版 7 | 出土遺物(38~41) | 67 |
| 図版 8 | 出土遺物(42~56) | 68 |
| 図版 9 | 出土遺物(57~70) | 69 |
| 図版 10 | 出土遺物(71~87) | 70 |
| 図版 11 | 出土遺物(88~100) | 71 |
| 図版 12 | 出土遺物(101~122) | 72 |
| 図版 13 | 出土遺物(123~145) | 73 |
| 図版 14 | 出土遺物(146~167) | 74 |
| 図版 15 | 出土遺物(168~184) | 75 |
| 図版 16 | 出土遺物(185~204) | 76 |

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るため、関係各機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部（農地整備課・大隅耕地事務所）は、志布志町横尾下地区における県営特殊農地保全整備事業を計画し、事業地区内の埋蔵文化財の有無について県文化課に照会した。

これを受けて文化課は、昭和 6 1 年 4 月当該地区の埋蔵文化財分布調査を志布志町教育委員会と実施した。

分布調査の結果、当該事業区域内に下牧遺跡・上田屋敷遺跡の存在していることが判明した。そこで、事業実施前に遺跡の範囲・性格などを把握するため、昭和 6 3 年に確認調査を実施した。

確認調査の結果、遺物・遺構等の確認された開場整備区域については、実施計画再検討をし、設計変更（盛土工法）による現地保存の措置をとるが、設計変更の措置を取り得ない幹線舗装道路については、翌年度以降の全面発掘調査を実施することとなった。

第 2 節 調査の組織

| | | | |
|-------|-----------|--------|-------|
| 調査主体者 | 志布志町教育委員会 | | |
| 調査責任者 | ＃ | 教育長 | 徳重俊二 |
| 調査事務 | ＃ | 社会教育課長 | 慶田泰輔 |
| | ＃ | 課長補佐 | 井手富男 |
| | ＃ | 兼係長 | |
| | ＃ | 主査 | 山根陽子 |
| | ＃ | 主査 | 米元史郎 |
| | ＃ | 主事 | 天野和博 |
| | ＃ | 主事 | 淵之上純子 |
| | ＃ | 主事補 | 小村美義 |
| 調査担当者 | ＃ | 主査 | 米元史郎 |
| | ＃ | 主事補 | 小村美義 |

なお、調査企画等において県教育庁文化課長・向山勝貞氏、同主任文化財主事兼埋蔵文化財係長・吉元正幸氏、県埋蔵文化財センターの主任文化財主事兼調査係長・戸崎勝洋氏に指導・

助言を得た。

調査現場・遺物整理・報告書作成においては、確認調査から全面発掘調査に至るまで埋蔵文化財センター文化財主事・井ノ上秀文氏に指導・助言を得た。

第3節 調査の経過

確認調査は、鹿児島県からの受託事業として志布志町教育委員会が調査主体者となり、黒文化課の協力を得て実施した。

その結果、事業地区内に遺物の出土する区域があることが判明した。調査の内容については、志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）によって発表されている。

この調査結果を受けた事業主体の大隅耕地事務所は、圃場対象地区の設計変更（盛土工法）により現地保存を実施したが、幹線舗装道路については設計変更の措置を取り得ず、全面発掘調査の要望をした。この為、志布志町教育委員会は平成4年度に幹線舗装道路の発掘調査を実施することとした。

○発掘調査は、平成4年10月22日から12月3日の実数27日間実施した。この中で道路計画路線のうち地形などを考慮し、1～5の試掘トレンチを設定し、遺物の確認された部分について全面発掘を実施することとした。この間の調査の経過と概要については日誌抄をもつてかえる。

- 10月22日（木）発掘機材・用具搬入。確認点検。作業員への調査方法・調査上の留意点の説明。草木伐採作業。グリッド配置。
- 10月23日（金）道路部分を重機（ユンボ）により表土剥ぎ。0-2区はシラスが検出し、遺物包含層が確認できなかった。M-2区、N-2区ベルトコンベア使用によるⅤ層（遺物包含層）掘り下げ。早期土器片数点出土。
- 10月26日（月）L-2区、M-2区表土剥ぎ及びⅢ層（遺物包含層）掘り下げ。N-2区Ⅴ層掘り下げ。Ⅲ層より晚期土器片数点出土。
- 10月27日（火）L-2区、M-2区Ⅲ層掘り下げ。N-2区Ⅴ層掘り下げ。Ⅲ層より晚期土器片数点出土。
- 10月28日（水）L-2区、M-2区Ⅲ層掘り下げ。N-2区Ⅴ層掘り下げ。
層序が各所において若干の相違が認められ、遺物包含層の確認される部分と消失している部分が観察される。耕作による攪乱を受けていると思われる。
- 10月29日（木）L-2区、M-2区Ⅲ層掘り下げ。アカホヤ上面まで掘り下げる。N-2区Ⅴ層遺物出土状況及びグリッド配置図平板実測。写真撮影。遺物取上げ。
- 10月30日（金）L-2区、M-2区Ⅴ、Ⅵ層掘り下げ。遺物確認の為、清掃作業。ピット・22基検出。

- 11月4日(水) 重機による表土剥ぎ。L-2区, M-2区Ⅵ、Ⅶ層掘り下げ。遺物出状況及びピット平板実測。写真撮影。遺物取上げ。
- 11月5日(木) 重機による表土剥ぎ。L-2区, M-2区Ⅵ、Ⅶ層掘り下げ。遺物包含層・遺物の有無確認の為、1～5の試掘トレンチ設定。1、2トレンチ掘り下げ。完掘。遺物・遺構等は確認できなかった。試掘トレンチ位置図平板実測。
- 11月6日(金) L-2区Ⅶ層掘り下げ。3～5トレンチ掘り下げ。3、4トレンチ完掘。遺物・遺構等は確認できなかった。5トレンチⅢ層より晩期土器片多量出土。1～3トレンチ断面実測。完掘状況写真撮影。
- 11月9日(月) L-2区Ⅶ層掘り下げ。5トレンチⅢ層掘り下げ。遺物出土状況平板実測。遺物取り上げ。写真撮影。重機による腐土の埋め戻し。
- 11月11日(水) K-2グリッド表土剥ぎ及びⅢ層掘り下げ。5トレンチⅢ層掘り下げ。第1号畦畔断面実測。写真撮影。重機による腐土の埋め戻し。
- 11月13日(金) J-1区, K-1区Ⅲ層掘り下げ。5トレンチ遺物出土状況平板実測。写真撮影。遺物取り上げ。歴史散歩来訪。
- 11月17日(火) I-1区表土剥ぎ。ブロック壁撤去作業。J-1区, K-1区Ⅲ層掘り下げ。5トレンチ掘り下げ。完掘。5トレンチ断面実測。写真撮影。第2号畦畔断面実測。写真撮影。発掘調査指導の為、県埋蔵文化財センター文化財主事・井ノ上秀文氏来訪。
- 11月19日(木) I-1区Ⅲ層掘り下げ。4トレンチ断面実測・写真撮影。K-1遺物出土状況平板実測。取り上げ。J-1区遺物出土状況写真撮影。重機による埋め戻し。
- 11月24日(火) I-1区, J-1区, K-1区Ⅲ層掘り下げ。遺物出土状況実測。第1号土壌検出。
- 11月26日(木) 早期の遺物・遺構等確認の為、第3号畦畔土層断面及び第4号畦畔土層断面に沿うようにL字型に確認トレンチ設定。Ⅴ、Ⅵ層掘り下げ。I-1区, J-1区, K-1区Ⅲ層掘り下げ。I-1区, J-1区遺物出土状況平板実測。遺物取り上げ。写真撮影。
- 11月27日(金) I-1区, J-1区, K-1区Ⅲ層掘り下げ。早期確認トレンチⅥ、Ⅶ層掘り下げ。第2号土壌検出。第3号畦畔土層断面実測。写真撮影。第1号土壌実測。
- 11月30日(月) I-1区, J-1区Ⅲ、Ⅳ層掘り下げ。早期遺物確認トレンチ完掘。完掘状況写真撮影。I-1区, J-1区遺物出土状況平板実測。写真撮影。遺物取り上げ。第4号畦畔土層断面実測。写真撮影。
- 12月1日(火) 用具水洗・点検後に発掘器材・用具を文化会館に収納。第2号土壌実測。
- 12月3日(木) 第2号土壌実測完了。作業終了。重機による埋め戻し。

第Ⅱ章 遺跡の位置・環境と周辺遺跡

第1節 遺跡の位置・環境

本町は鹿児島県の東端部で、志布志湾の湾奥部に位置し、海岸線は東西に約10km・内陸部に向かって約20kmで、南北に延びる釣鐘形の形状をなしている。

北東から東側へは、宮崎県都城市及び串間市と接して県境をなし、北西から西へは末吉町・松山町・有明町とそれぞれ接している。

南面する海岸線は、ほぼ中央に位置する市街地を挟んで、西側は砂浜海岸が続くのに対し、東側は日南層群で構成される山稜が海までせまり岩礁海岸を構成している。尚、市街地は比高40m程のシラス台地の海食崖下に発達した古期砂丘帯上に立地している。これは約6000年前の縄文海進の名残りと考えられる。

内陸部の地形は、山地と台地それぞれに河川に沿って小規模に発達した沖積低地に大別出来る。

北部から東部にかけての山稜地帯は、主に新生代古第三期の地層と考えられている日南層群よりなる南部河山系の西端域となっている。さらにこれより西に広がる広大なシラス台地（曾於丘陵地）には、この山系より派生する残丘状山地が、北東より南西方向に散発的に次第に小起伏となって延びている。

シラス台地は、河川の活発な浸食作用によって深い谷で分断され、さらにその支流によって、樹枝状に拡がった谷頭侵食で細かく刻み込まれており大小幾多の台地が形成されている。また谷底の低地とは急傾斜面や崖によって区切られている。

町内を流れる主な河川は、西側を延長2.4kmの安楽川が、東側を延長1.5kmの前川がそれぞれ並行して南流している。また、これらの河川の中流域から下流域にかけては各所に大小の河岸段丘や谷底平野が形成されている。

このような地形のため、町内に分布する約200ヶ所の埋蔵文化財遺跡の多くは台地上に立地しているが、内陸山間部では山稜に付随するそれぞれ独立した小規模な山麓舌状台地基部（谷あいの湧水を利用するタイプ）、あるいはその辺縁部（台地下の河川を利用するタイプ）に立地しており、南部の広大な台地では、水源に近い台地中央部に遺跡の立地は見られず、これらの辺縁部、もしくは台地に付随する河岸段丘上に集中しているのが一般的な遺跡立地の傾向である。

以上志布志町の遺跡の立地に伴う地形的な自然環境を概観したが、今回発掘調査を実施した上田屋敷遺跡についても同様であり、前回の確認調査によって横尾下台地東側辺縁部全域に遺物が散布していることが確認された中で、特に今回の調査対象となった区域が、この台地に前川の支流小河川が奥深く刻み込んだ谷の周辺にあたり、最も遺物分布密度の濃かった地域となっている。尚、この侵食谷の先端部にはかつて湧水があったことが知られており、遺跡もこの湧水を囲むように立地していたものと思慮される。

第2節 周辺遺跡

ここでは、俗に“縄文銀座”とも呼ばれている前川流域の中でも、特に今回調査した上田屋敷遺跡を中心に、前川下流域の発掘調査の行われた遺跡について紹介をしてみたい。

下田遺跡は、平成3年に土地改良事業に伴って確認調査を実施した遺跡で、工事によって一部削平を受ける部分を拡張して発掘調査したところ、塞之神式土器を主体とする縄文時代早期の遺物が出土した。この中で特に注目すべきものとして過去出土例の極めて少なかった縄文早期の壺形土器が確認されたことである。約20点の刻目隆起帯を持ったこの壺形土器片は、この遺跡に隣接する別府台地の石踊遺跡でも確認されたことが報告されている。さらに、これらに共伴して土製の耳栓も出土している。

山之上遺跡は、前川と益倉川の合流地点の南側で、下田遺跡と谷を隔てた南側の石踊台地の北西隅畑地に立地しており、昭和42年に確認調査が行われ、縄文早期の塞之神式土器や石核・敷石住居跡等が発見されている。

石踊遺跡は、昭和52年特農事業に伴う調査で遺跡の所在が確認され、その後農道舗装部分の2400㎡について昭和52・53年に発掘調査が行われている。その結果、壺式・曾畑式土器をはじめ縄文早期から晩期までの各時代の遺物が出土した。

野久尾遺跡は、昭和51・52に発掘され燃糸文・壺式・春日式の各土器が出土している。中でも壺式土器は約5000点の遺物の8割を占め、この土器型式の究明に重要な資料となっている。

小浜遺跡は、前川河口より700m付近のシラス台地南東緩斜面に立地している。昭和42年の調査によって、縄文時代中期及び後期の岩崎下層式・岩崎上層式・指宿式・市来式・草野式等の土器類と石錘・偏平半磨製石斧等が出土している。また、この遺跡の調査によって、背後の中世山城志布志内城の石段や隠し井戸などの遺構も確認された。

飛渡遺跡は、野久尾遺跡と同様に本町では珍しい尾根筋の鞍部平坦面に立地している遺跡で、隣接する島廻遺跡とともに昭和62年の特農事業に先立って確認調査が実施されている。出土遺物は、地形的な要因から一つの包含層に縄文晩期の黒川式土器・弥生時代の山之口式土器・古墳時代の壺等が混在している。この古墳時代の壺については、南九州の古墳時代に普遍的な成川式の土器とかけはなれ、東九州系の土器と類似した特徴を有している。

下牧遺跡は上田屋敷遺跡と同一台地に立地する遺跡、昭和63年の特農事業に伴う確認調査では遺物の出土は見られなかったが、調査区域の周辺地区壁面から縄文時代早期の円筒系土器が出土している。

最後に、今回発掘調査を実施する上田屋敷遺跡の、昭和63年に行われた特農事業に伴う確認調査の出土遺物について記載すると、台地内の各トレンチから石坂式・吉田式・前平式・桑ノ丸式・入佐式・黒川式等の縄文時代と伴に、部分的に残存している弥生時代の遺物包含層から弥生時代の壺や石斧等が出土している。尚、この遺跡からは昭和44年個人の造成工事によって、弥生時代中期の山之口式の完形土器が採集されている。

第1表 周辺遺跡一覧表

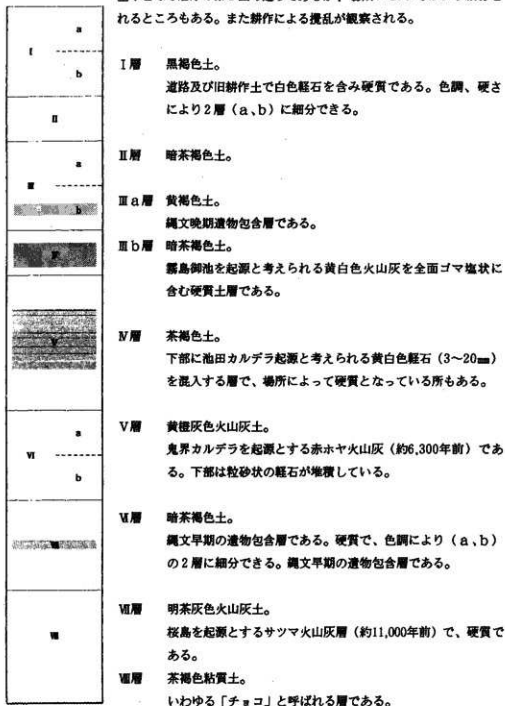
| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 地形 | 時代 | 出土遺物等 | 備考 |
|----|-------|------|-----|-----|----------------------------|-----------------|
| 1 | 二反野 | 帖二反野 | 台地 | 縄・弥 | 吉田式・石坂式・壺之神式・曾畑式・夜臼式・磨製石斧 | 志布志町発掘調査報告書(20) |
| 2 | 西原 | 西原 | 台地 | 縄文 | 黒川式・土製勾玉・石製勾玉・石鏃・石匙・打製土掘具 | 志布志町発掘調査報告書(20) |
| 3 | 大二反野A | 大二反野 | 台地 | 縄・弥 | 土器片 | |
| 4 | 大二反野B | 大二反野 | 台地 | 縄・弥 | 土器片・土鏃 | |
| 5 | 下田 | 下田 | 台地 | 縄文 | 壺之神式・耳栓・石匙・石鏃・叩き石・磨石 | 志布志町発掘調査報告書(22) |
| 6 | 山之上 | 石踊 | 台地 | 旧・縄 | 石坂式・壺之神式・石核 | 鹿児島考古(5) |
| 7 | 石踊 | 石踊 | 台地 | 縄文 | 吉田式・石坂式・壺之神式・壺式・曾畑式・岩崎式・黒川 | 志布志町発掘調査報告書(3) |
| 8 | 野久尾 | 野首 | 鞍部 | 縄文 | 熟糸文・壺式・曾畑式・春日式・指宿式・黒川式・脚横式 | 志布志町発掘調査報告書(2) |
| 9 | 小洞 | 小洞 | 傾斜地 | 縄弥古 | 岩崎式上層式・下層式・指宿式・市米式・草野式・石鏃 | 鹿児島考古(5) |
| 10 | 志布志城 | 野久尾 | 台地 | 中世 | | |
| 11 | 西中尾 | 西中尾 | 台地 | 縄・弥 | 土器片 | |
| 12 | 油田 | 油田 | 台地 | 縄・弥 | 土器片 | |
| 13 | 堂迫 | 堂迫 | 台地 | 縄・弥 | 打製石斧 | |
| 14 | 飛渡 | 飛渡 | 鞍部 | 縄・弥 | 黒川式・孔列文・山之口式・石鏃・石輪・円盤型石斧 | 志布志町発掘調査報告書(13) |
| 15 | 鳥廻 | 鳥廻 | 台地 | 縄・弥 | 円筒系土器・集石 | 志布志町発掘調査報告書(13) |
| 16 | 稲荷免 | 稲荷免 | 台地 | 弥生 | 土器片 | |
| 17 | 上田屋敷 | 上田屋敷 | 台地 | 縄・弥 | 吉田式・石坂式・壺ノ丸式・入佐式・黒川式・山之口式 | 志布志町発掘調査報告書(15) |
| 18 | 下牧 | 下牧 | 台地 | 縄・弥 | 円筒系土器・阿高式 | 志布志町発掘調査報告書(15) |
| 19 | 白木牟田 | 白木牟田 | 台地 | 縄・弥 | 石鏃 | |
| 20 | 上牧 | 上牧 | 台地 | 縄文 | 土器片 | |
| 21 | 中原 | 中原 | 台地 | 縄文 | 磨石 | |
| 22 | 井手元 | 井手元 | 台地 | 縄文 | 土器片 | |
| 23 | 横峯 | 前迫 | 台地 | 縄・弥 | 石斧・叩き石・砥石 | |
| 24 | 上佐野原 | 上佐野原 | 台地 | 弥生 | 土器片 | |
| 25 | 八反田 | 八反田 | 台地 | 縄・弥 | 前平式・黒曜石 | |
| 26 | 牧 | 牧 | 台地 | 縄・弥 | 土器片 | |



第1圖 上田屋敷遺跡周辺の遺跡

第Ⅲ章 層 位

基本となる層序は第2図の通りであるが、場所によってはより細分されるところもある。また耕作による擾乱が観察される。



第2図 土層模式柱状図

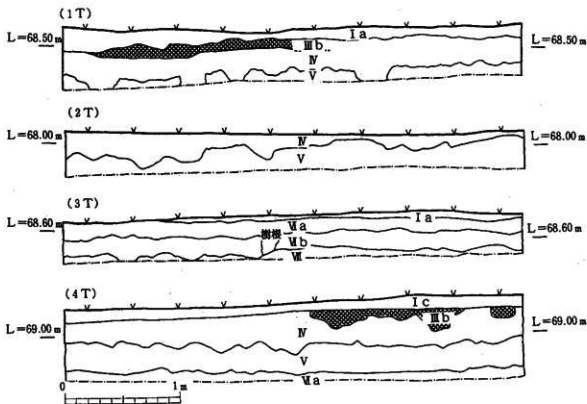
第Ⅳ章 調査の概要

第1節 調査概要

調査はまず遺跡の範囲を確認するため、現況地形を考慮して2×4mの試掘トレンチを設定した。その結果、1、2、4トレンチについては遺物包含層が確認されなかった。3トレンチはⅤ層は現存していたが、遺物・遺構等は認められなかった。5トレンチはⅢa層から多量の遺物出土が認められた。そこで第9図に示す区域について、東西方向にA～O南北方向に1、2の10×10mのグリッドを設定し全面発掘を行うこととなった。

調査区は、前回の確認調査で遺物の出土した旧3トレンチと今回の全面発掘調査の5トレンチに至るまで区域であり、調査は現状が道路であった為、ジャリ・床シラスを重機によって表土剥ぎを行い、Ⅲ層～Ⅴ層は人力で掘り下げた。Ⅲ層とⅤ層で遺物包含層が確認され、遺物・遺構が認められた。

遺構はⅤ層上面で性格不明の土壇2基が確認され、Ⅴ層では性格不明のピットを検出した。遺物はⅢ層で縄文晩期の遺物が多量出土した。Ⅴ層では少量ではあるが縄文早期の遺物が出土した。



第3図 上田屋敷遺跡第1～4トレンチ断面図

第2節 各試掘トレンチの調査

1 トレンチは調査区の東部標高約69mの地点に2×4mの大きさで設定した。層位はⅢb～Ⅴ層は現存していたが、Ⅲa層の遺物包含層は確認できなかった。遺物・遺構等は認められなかった。

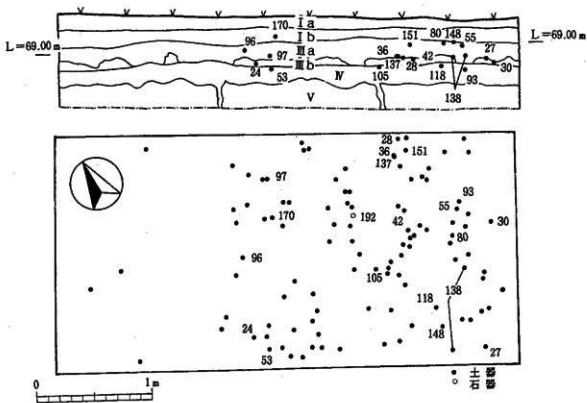
2 トレンチは1 トレンチの西側約14mで標高約68mの地点に2×4mの大きさで設定した。層位はⅣ、Ⅴ層は認められたがⅡ、Ⅲ層は確認できなかった。遺物・遺構等は認められなかった。

3 トレンチは2 トレンチの西側約16mで標高約69mの地点に2×4mの大きさで設定した。Ⅱ～Ⅴ層は確認できなかったがⅥ、Ⅶ層は認められた。Ⅵ層の早期の遺物包含層では遺物・遺構は認められなかった。

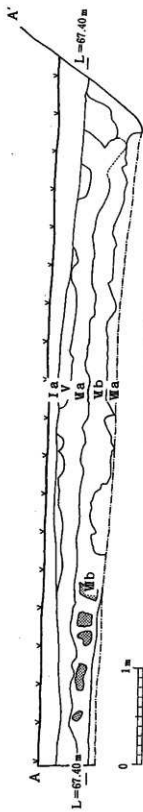
4 トレンチは3 トレンチの西側約16mで標高約69m地点に2×4mの大きさで設定した。Ⅲa層の遺物包含層は確認されず、遺物・遺構も認められなかった。

5 トレンチは4 トレンチの西側約15mで標高約69m地点に2×4mの大きさで設定した。Ⅲa層の遺物包含層から多量の遺物が出土した。

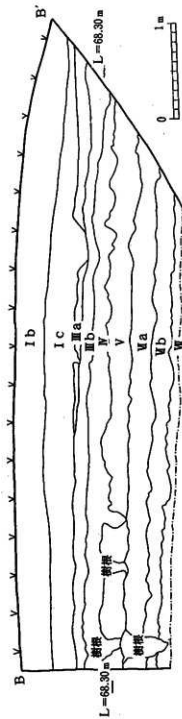
尚、5 トレンチ出土遺物については、第5節Ⅲ層の調査で一括して説明する。



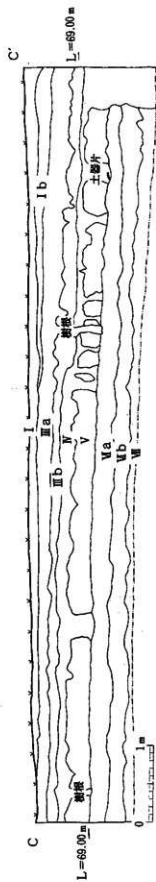
第4図 上田屋敷遺跡第5トレンチ平面図及び断面図



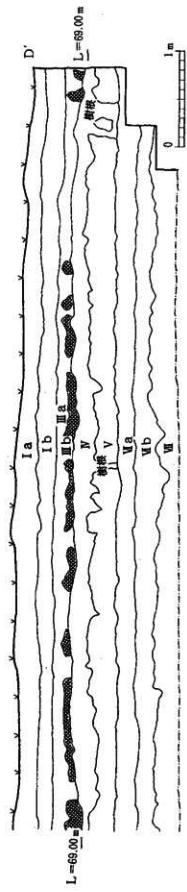
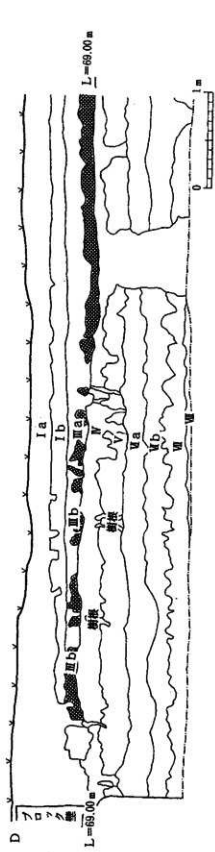
第5圖 上田屋敷遺跡第1号畦畔断面圖



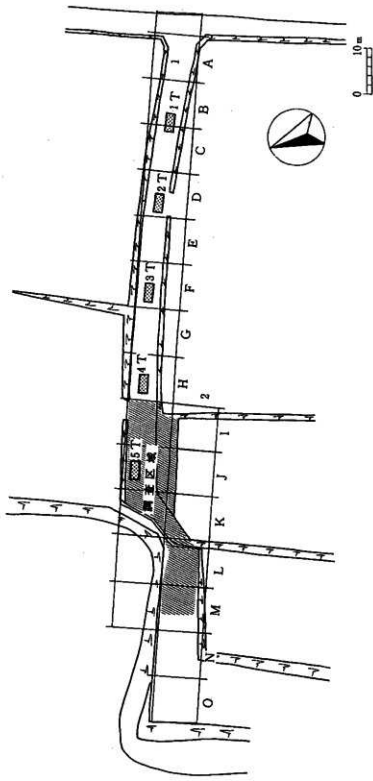
第6圖 上田屋敷遺跡第2号畦畔断面圖



第7圖 上田屋敷遺跡第3号畦畔断面圖



第8圖 上田國新渡路第4号地層断面圖



第9図 トレンチ・グリッド配置図及び調査区域図

第3節 層位

層位は、ほぼ第2図の通りであるが、若干の相違が観察された。I層は色調硬さ等により、場所によっては3層に細分できる。III a層はブロック状になるところもある。VI層はブロックとなる場所では2層に細分できる。

第4節 VI層の調査

1 遺構 (第10図)

L-2、M-2地区のVI層でピット22基を検出した。

検出面はVI層でN+V層で黄褐色土の埋土である。いずれもほぼ円形であるが、P8の縁に不定形のものも認められた。埋土中より遺物の出土が認められなかった為、その性格は不明である。

2 出土遺物(第11図)

1~8は器面に山形押型文を施すものである。いずれも厚感著しい。1、2、4~8は器壁は厚手であると思われるが3は薄手である。9は貝殻腹縁による押し引き文を横位に施した後、縦位にも施すものである。10は底部近くの破片で、浅い沈線を施すものである。

第5節 III層の調査

1 遺構

V層で土壌2基が検出された。

第1号土壌 (第13図)

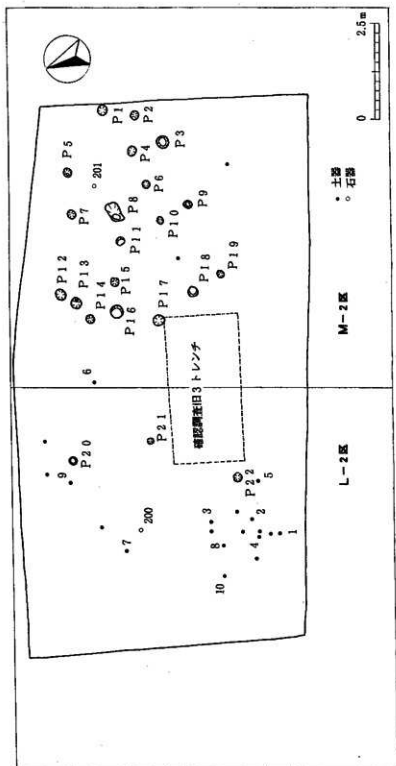
J-2地区のV層上面で土壌を検出した。N+V層で暗茶褐色の埋土である。ほぼ円形で大きさは75cm、深さ24cmである。埋土上面に遺物の出土が見られ、埋土中より木炭が少量観察されたが、遺物の出土が認められなかった為、その性格は不明である。

第2号土壌 (第14図)

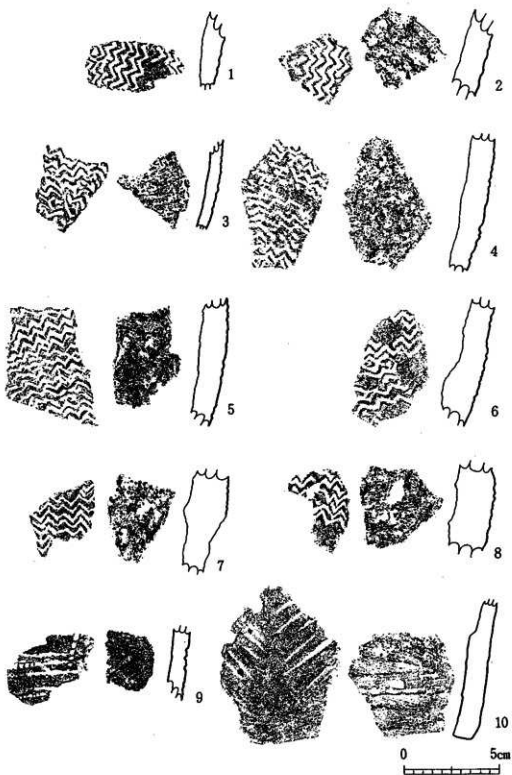
I-2地区では縄文時代早期の確認トレンチの掘り下げを進めていたときに、土層断面で土壌を検出した。このため土壌の一部を掘り込んでしまった。

土壌はV層から人為的に掘り込まれている。VI層が床面である。N+Vで黒褐色の埋土で、比較的大きな火山灰及び白色軽石を含んでいた。掘込み下部は比較的軟質で、V層の火山灰を含み、上部は比較的硬質で、N層の白色軽石を含んでいたが明確に細分できなかった。

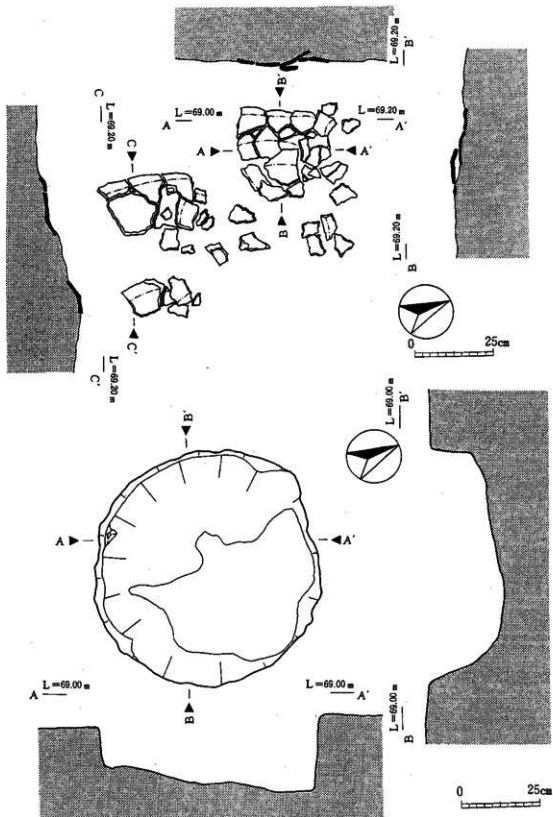
平面の形態は楕円形を呈し、断面の形態は上部から影らみを持ちながら中部に至り、中部から末広がりに平坦な底面に至るものである。長径110cm、短径85cm、深さ90cmである。埋土中から遺物は出土しなかった為、その性格は不明である。



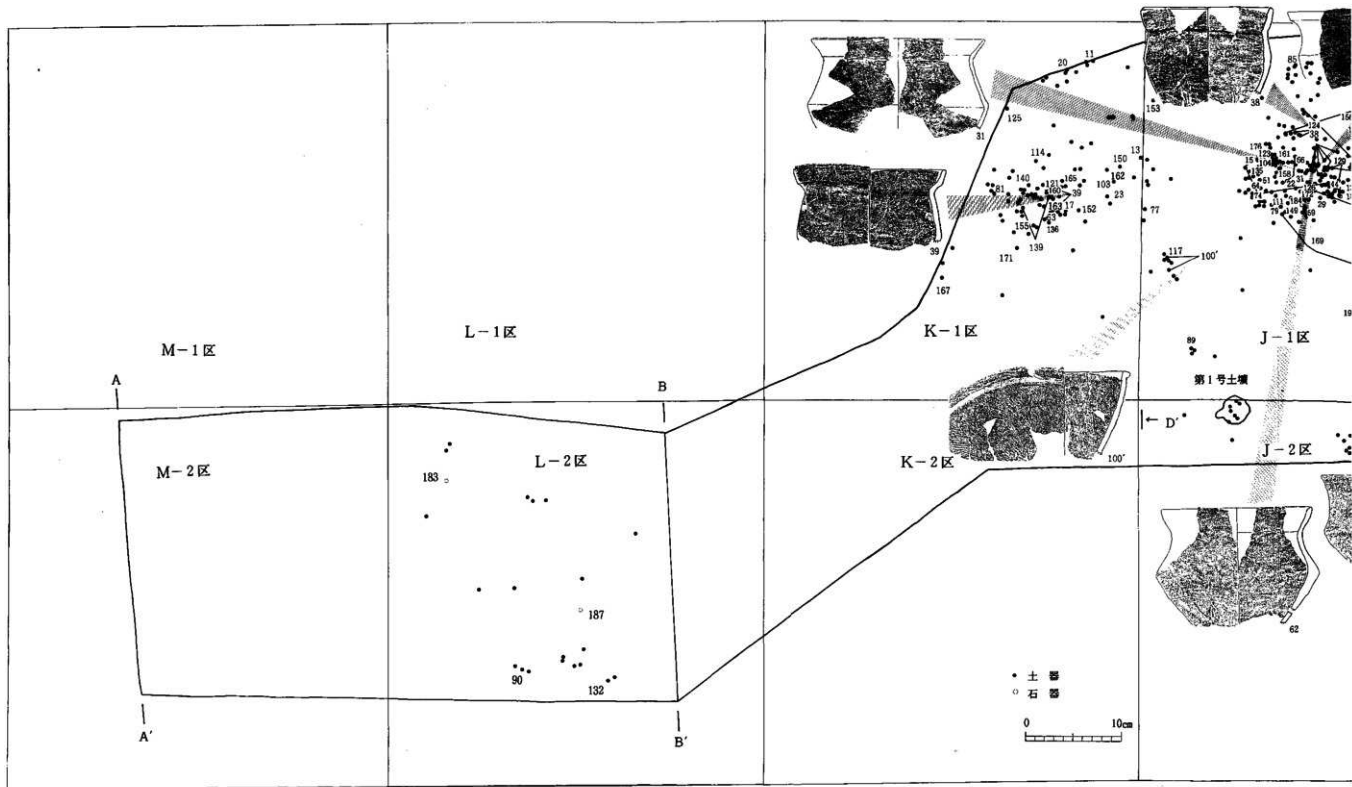
第10図 VI層遺物出土状況・ピット位置図

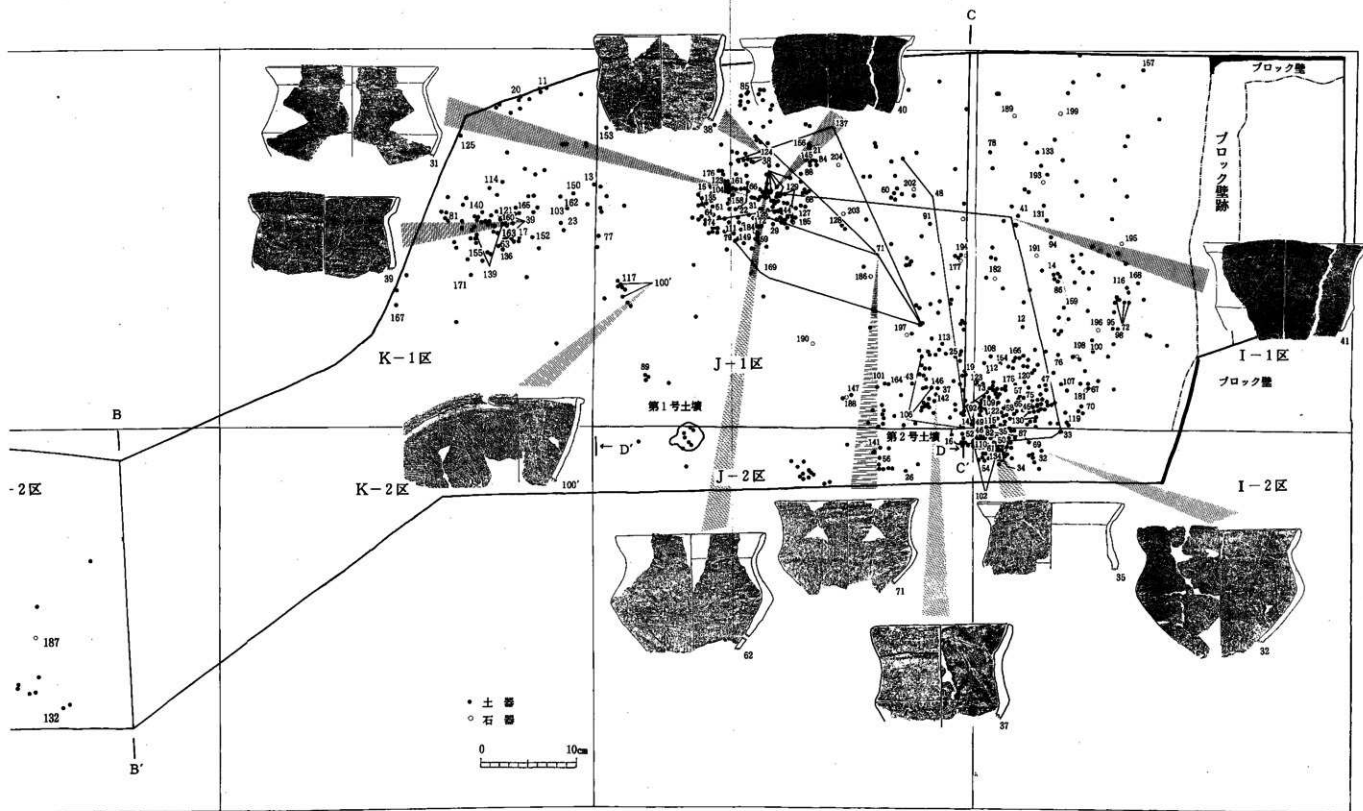


第11圖 出土遺物實測圖

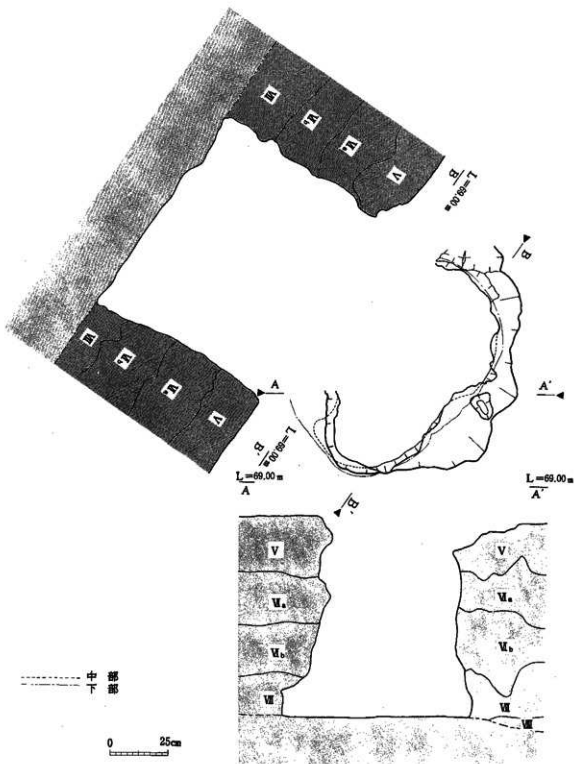


第12图 上田屋敷遺跡遺物出土状況・第1号土坑実測図

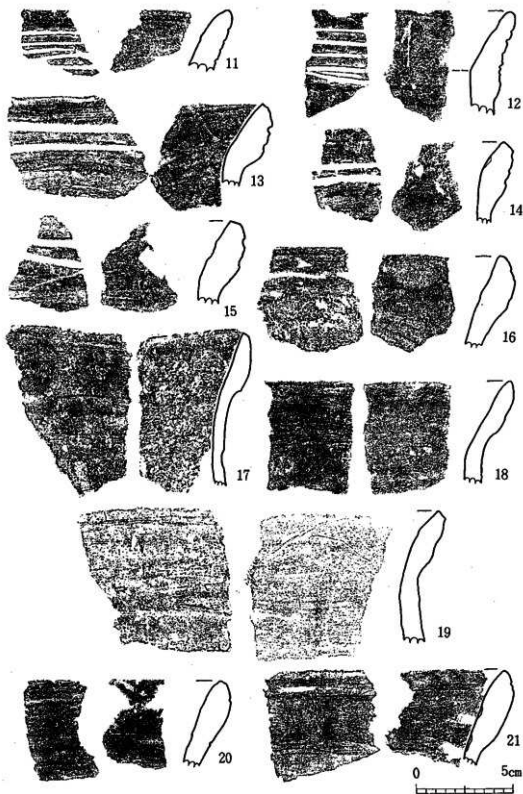




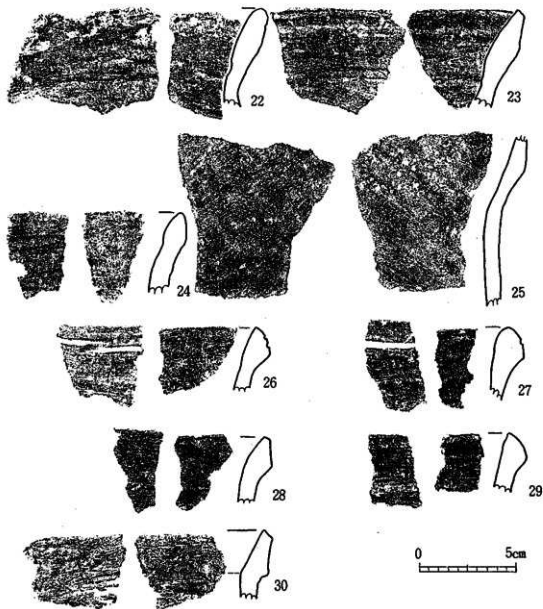
第13図 正房遺物出土状況・土壇位置図



第14圖 第2土樣與測圖



第15圖 出土器實測圖(1)



第16図 出土土器実測図(2)

2 出土土器(第15図～第37図)

縄文時代晩期の深鉢・浅鉢・マリ形土器である。完形に近い接合資料に恵まれ、ほぼ全形を窺い知ることができるものもある。

深鉢形土器(第15図～第34図)

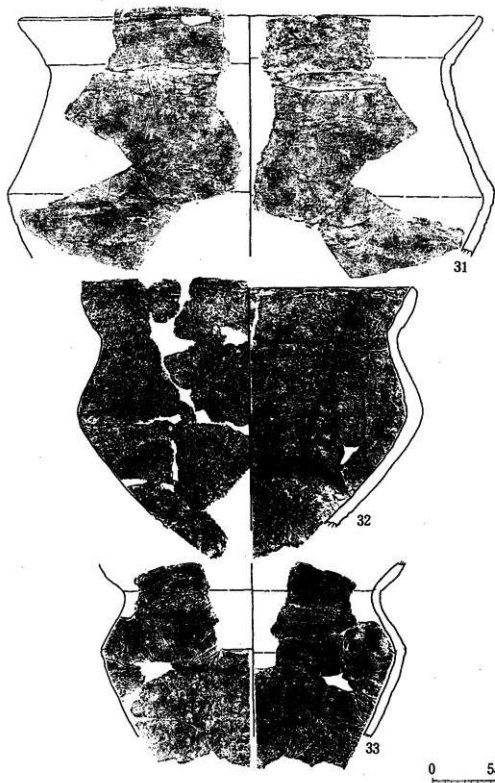
ほとんどが粗製深鉢である。大きさは様々であるが、基本的な器形は、屈曲する胴部から頸部で「く」字状に外反する口縁となるものである。

11、12は外反する口縁部の外面に数条の沈線を施すものである。12は屈曲部内面に稜を持つ。13~16は外反する肥厚させた口縁部外面に数条の沈線を施すものである。内外面ともナデ調整である。13~15は深く幅広い沈線を施すが16は浅く施し明瞭でない。17~25は外反する肥厚させた口縁部外面に沈線を施させないもので、頸部から口縁部へ至る部分が緩やかなものである。ほとんどナデ調整であるが19は荒いナデ調整で内外面とも凹凸が残る。外面にススが付着している。17、18はススが付着している。22は口唇部が摩滅している。内面にはススが付着している。24は口唇部が若干肥厚する。25は口唇部が剥落している。丁寧なナデ調整を斜位に施す。

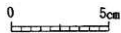
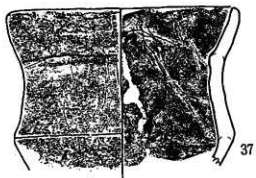
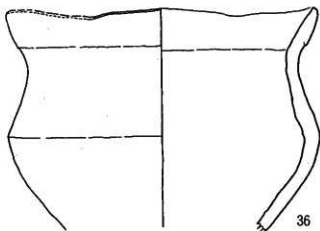
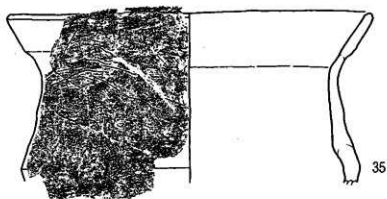
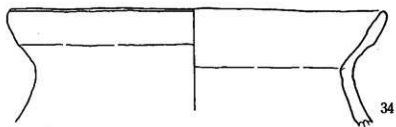
26~30は外反する口縁部が断面三角形になるものである。外面に稜を観察できる。26、27は口縁部外面の文様帯に沈線を施すものである。26の沈線は途切れている。28~30は文様帯は形成するが沈線は施さない。30は摩滅している。いずれも内外面は丁寧なナデ調整である。

31は大形の深鉢である。復元口径36.8cmを測る。胴部で屈曲し頸部から大きく「く」字状に外反する口縁となるもので、口縁を肥厚させることにより口縁帯を形成する。口縁部と胴部が明瞭に区別される。外面はハケ目状の丁寧なナデ調整であるが、胴部屈曲部下端の外面と口縁部内面は摩滅している。胴部下端にススが付着する。32は復元口径26.5cmを測る。胴部で緩やかに屈曲し、頸部から外反する口縁となるものである。口縁部と胴部は若干不明瞭に区別される部分も観察される。内外面とも横位のナデ調整で、やや荒い。外面の胴部屈曲部上位から口縁部にかけて多量のススが付着する。また内面の胴部屈曲部下位にもススが付着する。33は胴部で屈曲し大きく外反する口縁となるものである。口唇部は剥落しているおり口縁部は若干肥厚する。外面は荒いミガキ調整で胴部上位は部分的に光沢を観察できる。内面は胴部上位は器面調整が荒く凹凸を生じるが、下位は横位の丁寧なナデ調整である。屈曲部に粘土を貼りつけ補強しているのが観察できる。34は復元口径20.1cmを測る。頸部が「く」字状に屈曲し、屈曲部内面及び口縁部外面に稜をもつ。器面調整は荒く凹凸が生じている。内外面とも荒いミガキ調整であるが部分的に光沢が観察される。ススが付着している。35は胴部及び頸部で屈曲し、口縁部で大きく外反する口縁で復元口径19.2cmを測る。口縁部は若干肥厚する。胴部屈曲部及び頸部内面に稜をもつが、口縁部外面の稜は不明瞭である。外面はミガキ調整であり、内面は荒いミガキ調整で器面に凹凸が観察される。ススが付着している。36は山形気味の口縁になるもので、復元口径17.4cmを測る。山形の形成は緩である。口縁部は若干肥厚するが、明瞭な口縁帯を形成しない。内外面とも荒いナデ調整である。頸部に多量のススが付着している。37は復元口径12.3cmを測る小形の深鉢である。胴部外面及び頸部の屈曲部内面に稜をもち、口縁部は若干肥厚する。内外面とも荒いミガキ調整である。頸部にススが観察される。38は小形の深鉢で復元口径14.3cmを測る。胴部で緩やかに内湾しながら頸部で「く」字状に屈曲し、若干外反する肥厚口縁帯を形成する。頸部屈曲部に稜を持つが胴部には持たない。また口縁部上端にも稜をもつ部分がある。外面は荒いミガキ調整で部分的に光沢が観察され、胴部内面は荒いナデ調整である。頸部内面に多量のススが付着している。

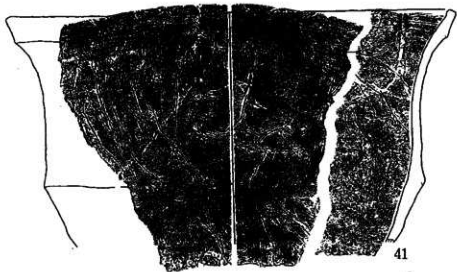
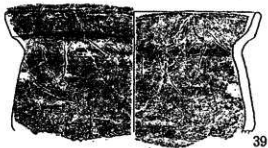
39は復元口径20.3cmを測る。胴部及び頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部が内湾気味に立ち



第17圖 出土土器實測圖(3)



第18圖 出土器實測圖(4)



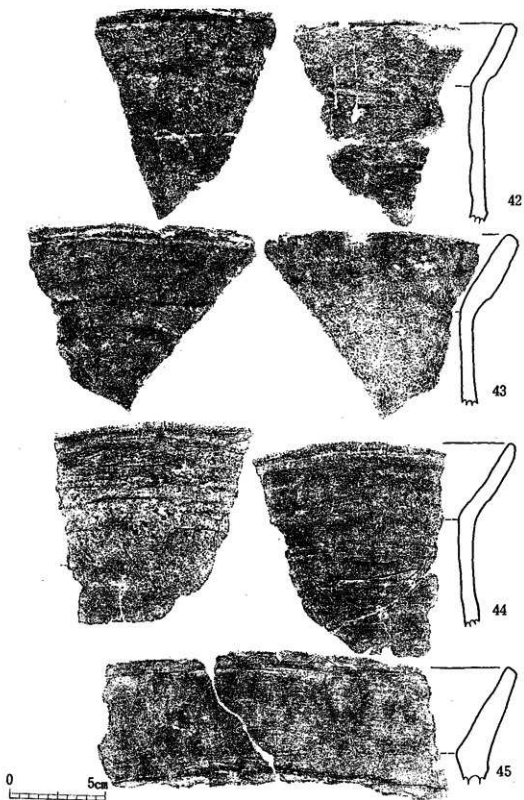
0 5cm

第18圖 出土土器実測圖(5)

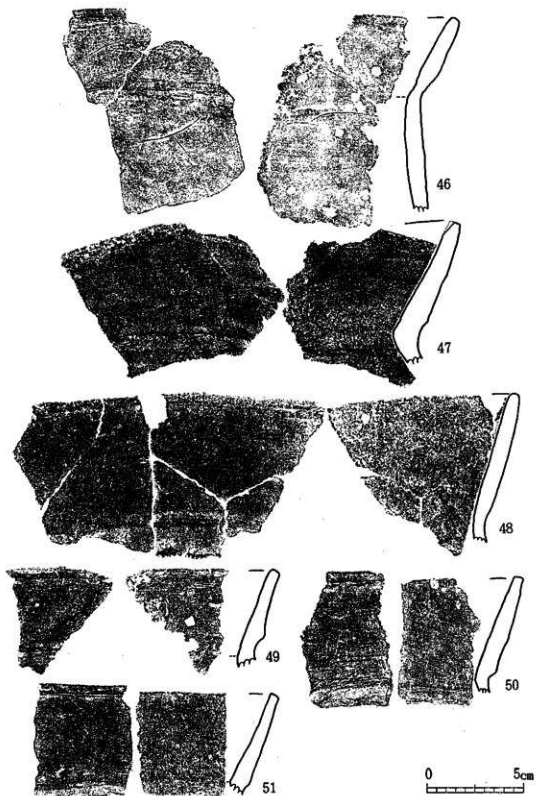
あがるものである。屈曲部内面と口縁部外面に稜を持ち、胴部と口縁部が明瞭に区別される。また胴部上位には円孔を穿いている。内外面ともミガキ調整であるが、内面の胴部から頸部屈曲部までは若干摩滅している。外面にはススが観察される。40は復元口径41.6cmを測る。胴部で屈曲し内湾しながら立ち上がり、外反する短い肥厚口縁となるものである。内外面とも横位の荒いナデ調整であるが、内面は部分的ではあるが丁寧なナデを施す。外面胴部下位と内面の器面調整が荒いため凹凸を生じている。胴部下位の外面にはススが付着し、小礫を多量に含む。41は復元口径35.8cmを計る。胴部屈曲部から内湾気味に立ち上がり外反する短い肥厚口縁帯を形成するものである。内外面とも横位の荒いナデ調整で、器面に凹凸が観察される。

42～61は外反する口縁が肥厚し、口縁帯を形成するものである。頸部から口縁部に至る部分に段が生じる。屈曲部内面に稜を持つ。また肥厚する口縁帯の形成は丁寧に仕上げるものが主体を占めるが、雑に仕上げるものもある。口唇部はほぼ平坦に仕上げ、平縁口縁と波状口縁が存在するようである。42は荒いナデ調整で小礫を多量に含む。43は明峻な口縁帯を形成するものである。外面はナデ調整であるが内面は摩滅している。44は口縁部外面の稜はやや不明瞭である。外面は荒いナデ調整であるが、内面は丁寧なナデ調整である。45は内外面とも丁寧なナデ調整である。46の内面はやや摩滅している。47は山形の口縁になるものである。内外面ともナデ調整である。小礫が観察される。48は器壁が薄く長い口縁帯を形成するものである。内外面とも丁寧なナデ調整である。外面にススが付着している。49は口縁帯を明峻に形成するものである。内面は摩滅している。50、51は口縁部外面及び屈曲部内面の稜が明瞭なものである。51の外面はナデ調整であるが内面はミガキ調整である。52、55の口縁部外面は荒いナデ調整で外面に凹凸が観察できる。53は内外面ともナデ調整である。54は外面は荒いナデ調整であるが内面はミガキ調整である。56の外面は丁寧なナデ調整で内面は刷毛目状の丁寧な調整である。57は内外面ともミガキ調整である。外面はやや摩滅している。58は器面の調整が荒い。内外面とも摩滅している。59は若干内湾気味に外反するものである。口縁部上端に段を生じ、屈曲部下端は剥落している。60は若干短めに口縁帯を形成するものである。金雲母が観察できる。61は屈曲部内面に明峻な稜を持つものである。口縁部上端が剥落し、内面は摩滅している。48、53、56、60はススが付着している。

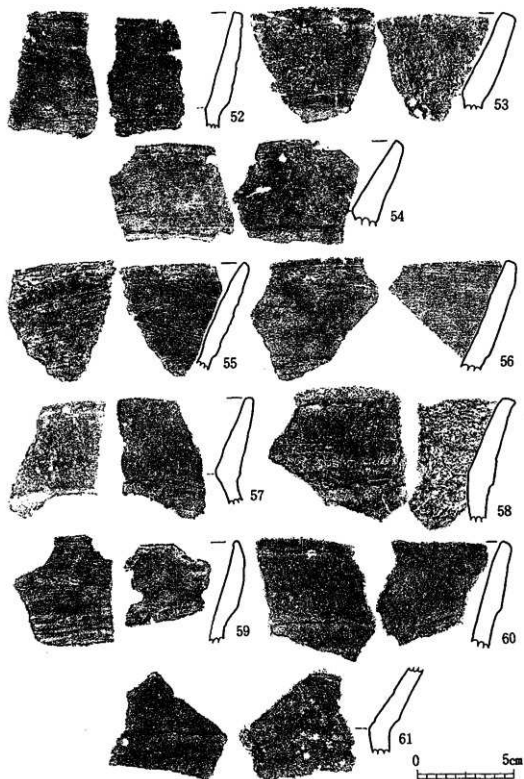
62～66は外反する口縁で口縁帯を形成しないが、屈曲部に稜を持つものである。62は復元口径24.4cmを測る。胴部が屈曲し外反する口縁を呈するものである。胴部屈曲外面に稜を持ち口縁部は若干肥厚する。頸部から胴部屈曲部上位までヨコナデ調整で、下位は縦位のナデ調整である。口縁部から頸部にかけて多量のススが付着している。色調は黄褐色である。63は内外面ともナデ調整であるが摩滅している。口縁部上位にススが付着している。64は外面は丁寧なナデ調整であるが、内面は荒いナデ調整である。65は内外面とも摩滅している。屈曲部の稜は明瞭である。66は内湾気味に大きく外反するものである。外面にススが付着する。67は外反する口縁部上端が若干立ち上がり気味となるものである。外面に稜をもつ。外面は荒いナデ調整であるが、内面は丁寧なナデ調整である。



第20圖 出土土器実測圖(6)



第 21 圖 出土土器実測圖 (7)



第 2 2 图 出土土器类测图 (8)

68~72は短く僅かに外反する口縁である。屈曲部内面に稜を持つ。68は内外面とも丁寧なナデ調整である。69は内外面とも荒いナデ調整である。外面にススが付着している。70は内外面ともミガキ調整である。71は胴部で屈曲し内湾気味に立ち上がり、口縁端部が短く外反するもので復元口径18.8cmを測る。胴部外面及び口縁部上端内面に稜を持つ。内外面とも荒いナデ調整で凹凸が観察される。器壁は薄く色調は赤褐色である。胴部屈曲部上位から口縁部にかけてススが付着している。72は復元口径17.2cmを測る。胴部屈曲部から緩やかに内湾しながら外反する口縁部端部で、短く僅かに開くものである。胴部外面及び口縁部端部に稜を持つ。内外面とも摩滅著しい。

73~77は内湾気味になる口縁である。73は山形の口縁となるものである。外面はナデ調整であるが内面はミガキ調整である。74は荒いナデ調整で凹凸が観察される。外面にはススが付着している。75、76の外面は丁寧なナデ調整であるが内面は若干摩滅している。77は内外面ともミガキ調整である。

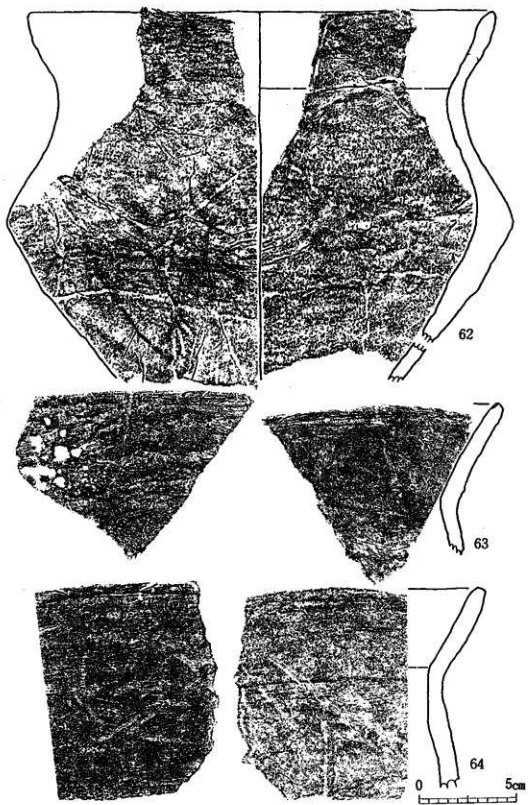
78~95は直口気味の口縁である。口唇部は丸く仕上げるものと平坦に仕上げるものの両方が存在するようである。78,82,85,87,89,94は内外面ともナデ調整である。78,80,81は内外面とも丁寧なナデ調整である。83は若干肥厚させるものである。84は口唇部を若干肥厚させ丸く仕上げている。86は外面はナデ調整であるが内面はミガキ調整である。器壁が薄い。88の外面は荒いナデ調整で器面に凹凸を生じるが、内面は丁寧なナデ調整である。90の外面は摩滅しているが、内面は丁寧なナデ調整である。91は内外面とも荒いナデ調整である。92は円孔を穿つもので三ヶ所観察できる。外面は丁寧なナデ調整であるが、内面は若干摩滅している。93は摩滅しており器面に凹凸が生じている。95は内外面とも荒いナデ調整である。器面に凹凸を生じる。

96~98は口縁部上端が若干肥厚するものであるが、傾きは不安である。96は口縁部内面上端が剥落しているが外面は丁寧なナデ調整である。97は外面に凹線を巡らせるものである。内外面ともナデ調整である。外面にはススが付着している。98は外面は荒いナデ調整で凹凸が観察されるが、内面はナデ調整である。

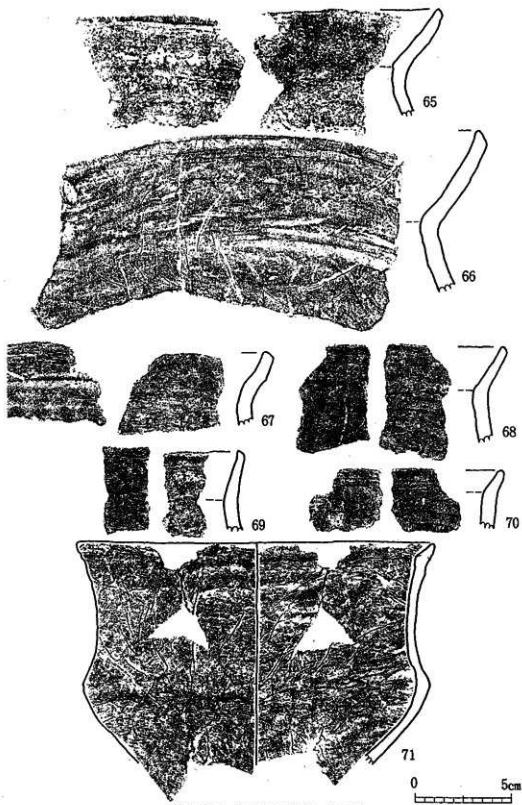
99は口縁部内面に明瞭な稜を持つものである。外面はナデ調整であるが、内面はミガキ調整である。100は若干肥厚させた口縁部である。外面に棒状の施文具により、下から刺突文を施すものである。外面は丁寧なナデ調整である。内面はミガキ調整である。100'は復元口径20.3cmで推定器高15cmと思われるものである。底部近くから緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部がやや開く器形となるものである。口縁部は断面台形状の貼り付けで形成する。外面は条痕である。条痕を施した後に、縦位の荒いナデ調整をする部分が観察できる。内面は縦位の丁寧なナデ調整の部分と荒いハケ目状の調整部分が観察できる。小礫を多量に含む。

胴 部 (第28図~第31図)

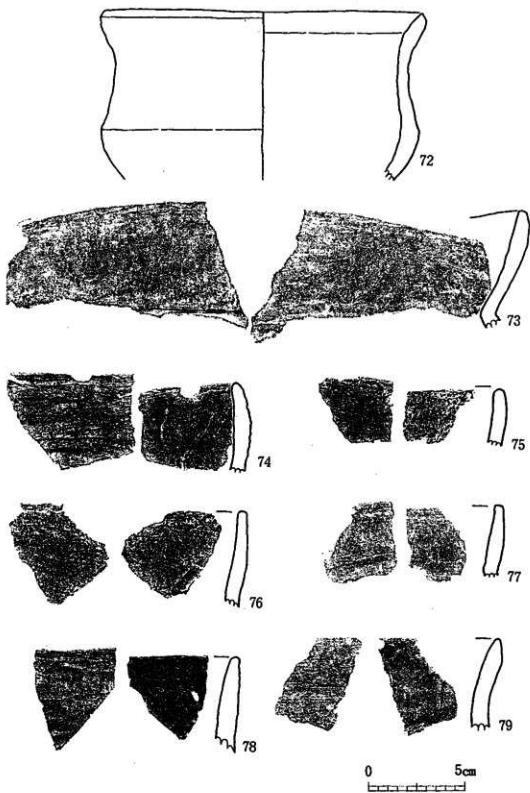
101~116は大形深鉢の胴部と思われるものである。101、102は緩やかに屈曲し底部に至るものである。102の胴部外面の稜は明瞭であるが、101は乱れが観察できる。101は胴部上位外面



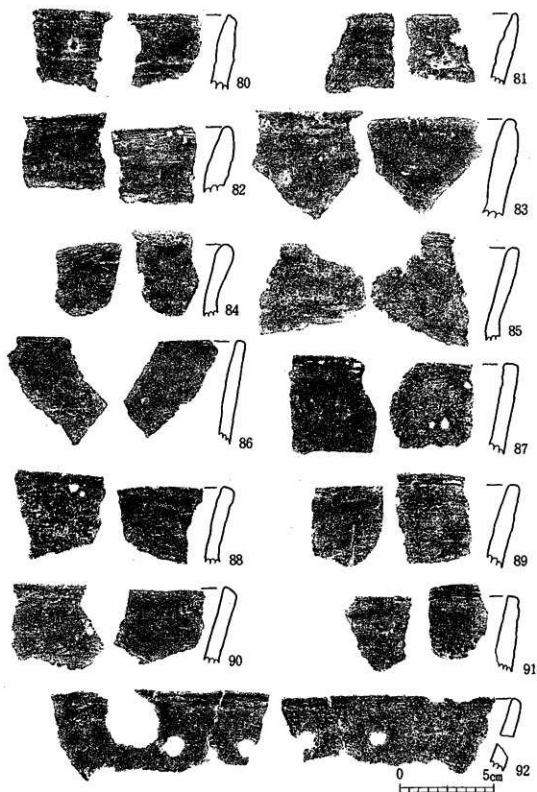
第23圖 出土土器與測圖(8)



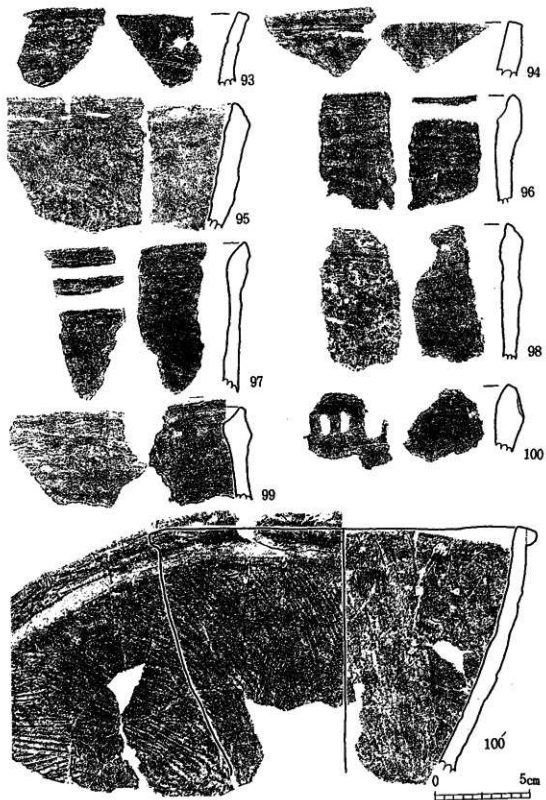
第24圖 出土土器実測圖(10)



第 2 5 圖 出土土器與測圖 (11)



第26图 出土土器实测图(12)



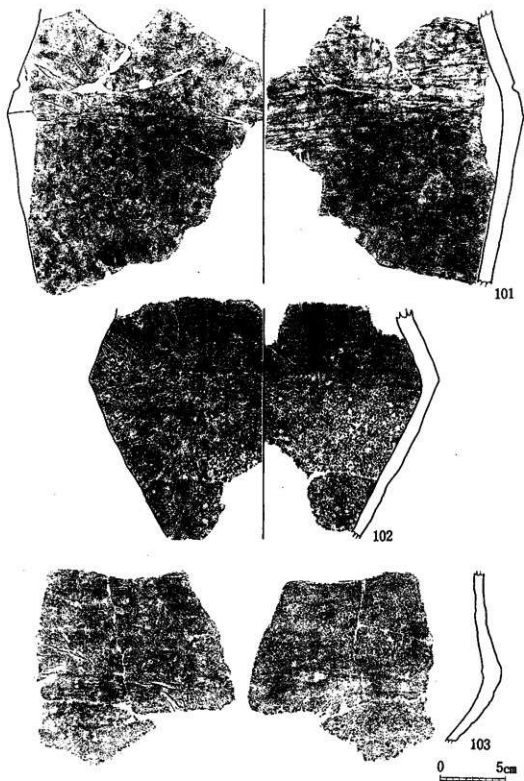
第27圖 出土土器實測圖(13)

の横方向にハケ目状の丁寧な調整を施し、下位は斜位のハケ目状の丁寧な調整である。胴部上位の内面は横位のナデ調整で、下位は横位及び斜位の丁寧なハケ目状の調整である。胴部上位に多量のススが付着している。102は外面にハケ目状の丁寧な調整を横位に施すものであるが、胴部下位は摩滅している。内面は摩滅している。多量の小礫を含む。屈曲部に多量のススが付着している。103は内外面ともナデ調整であると思われるが、摩滅している。少量ではあるが胴部上位にススが付着している。104は外面の横方向にハケ目状の丁寧な調整を施すもので、内面も横位にハケ目状の丁寧な調整を観察できる。内外面ともやや摩滅している。ススが多量に付着している。105はハケ目状の丁寧な調整を内外面に横位及び斜位に施すが、胴部上端の内面はミガキ調整である。106は内面はナデ調整で、やや摩滅しているが外面はミガキ調整である。内外面の屈曲部にススが付着している。107は斜位及び横位の丁寧なナデで内外面を仕上げるものである。胴部上位に多量のススが付着する。108は内外面とも摩滅している。109はハケ目状の調整を外面の横方向に施すがやや荒い。内面はナデ調整であるが、一部ミガキ調整が観察できる。110は内外面とも横位のナデ調整である。屈曲部上位にススが付着する。111は内外面とも横位の丁寧なナデ調整である。112は横位にハケ目状の調整を外面に施すが、やや荒く器面に凹凸が観察できる。内面はナデ調整である。全面にススが付着する。113は内外面ともナデ調整である。114は屈曲部の稜がやや不明瞭のものである。外面の胴部屈曲部の上位は横位のナデ調整で、下位は斜位のナデ調整である。内面は横位のナデ調整である。外面上位及び内面屈曲部に、多量のススが付着する。114は内外面とも摩滅している。内面には多量のススが付着している。115は円孔を胴部に穿つものである。外面は丁寧なナデ調整であるが、内面はやや摩滅している。116は外面に条痕が観察されるものである。内面はナデ調整である。

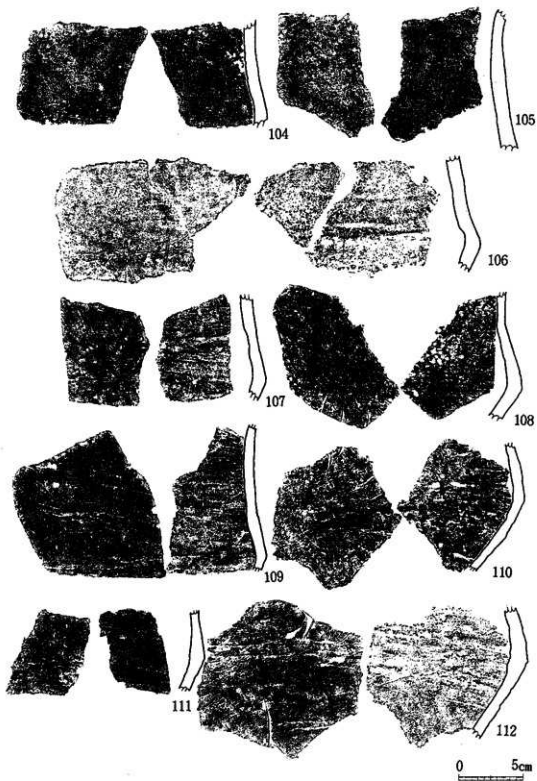
117~124は中・小形の深鉢の胴部と思われるものである。117,118は器壁が薄いものである。117は内外面とも横位のナデ調整である。118は内外面ともハケ目状の丁寧な仕上げをするが、一部ミガキが観察される。119は内外面とも丁寧な横位のナデ調整である。頸部付近にススが付着する。120は胴部で「く」字状に屈曲するものである。内外面とも横位のナデ調整である。122は外面はミガキ調整で内面はナデ調整である。123は内外面とも横位の荒いナデ調整である。124は底部近くの胴部である。内外面とも荒いナデ調整である。外面にススが付着する。125は頸部にリボン状の突起を付するものである。内外面とも摩滅している。126は三日月状の刺突を施すものである。内外面とも横位のナデ調整である。

底 部 (第31図~34図)

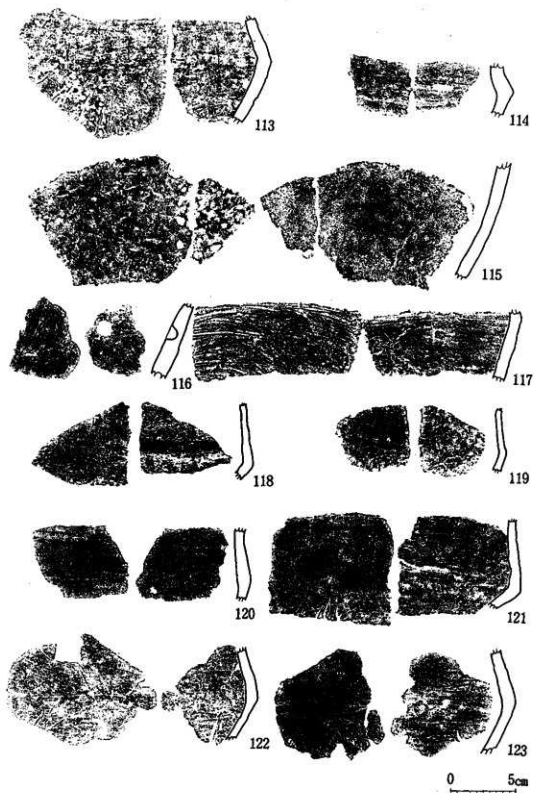
127~145は深鉢の底部と思われるものである。底部は平底が主体を占めるが127,137,140は上底である。底部の側面に若干の相違が観察される。緩やかに胴部にいたるもの(127~133)、ほぼ直線状に胴部に至るもの(134~142)、直線状に立ち上がり緩やかに胴部に至るもの(143, 144)、底部端部が張り出すもの145が観察できる。ほとんどが内外面ともナデ調整である。



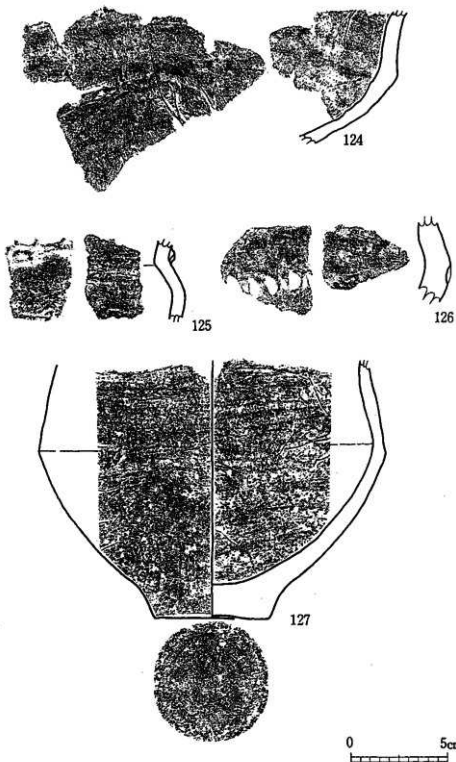
第28圖 出土器與測圖(14)



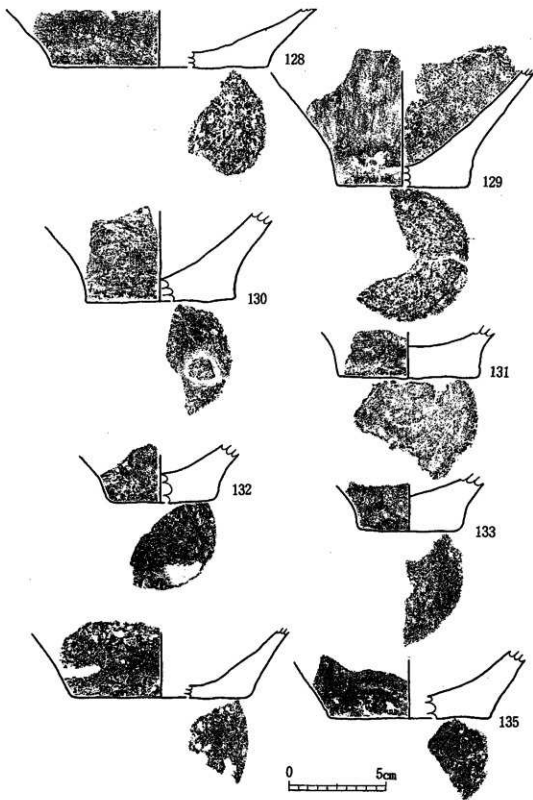
第 2 9 圖 出土土器実測圖 (15)



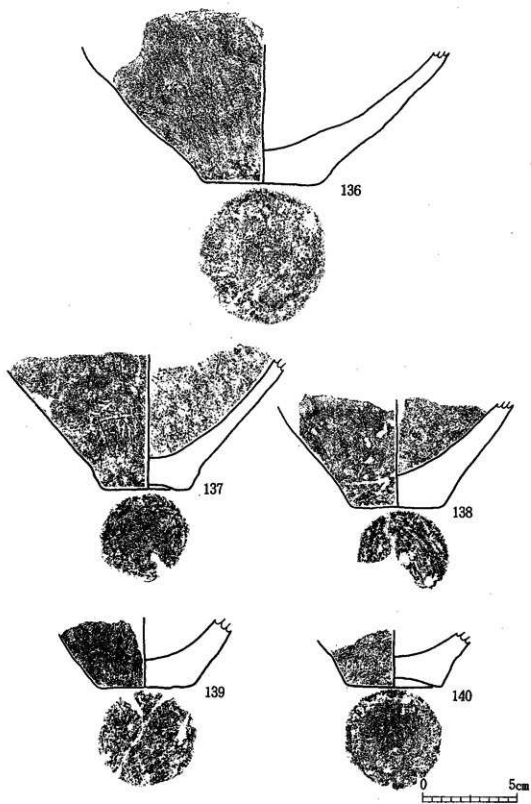
第30圖 出土土器実測圖(16)



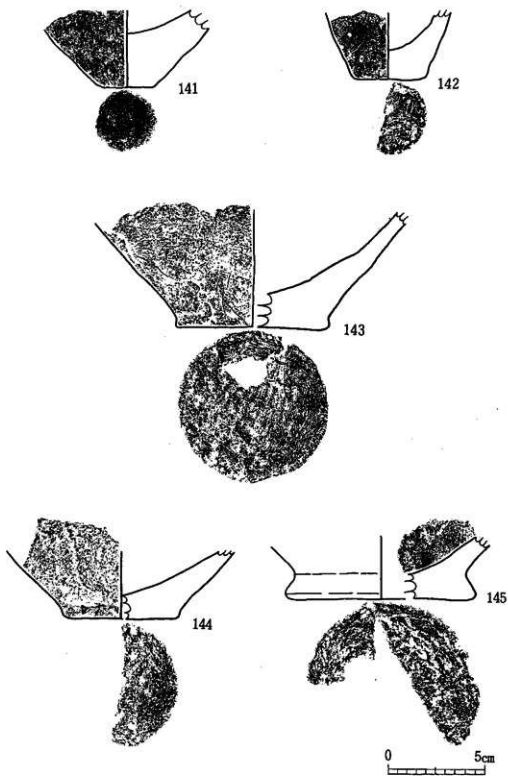
第31图 出土土器实测图(17)



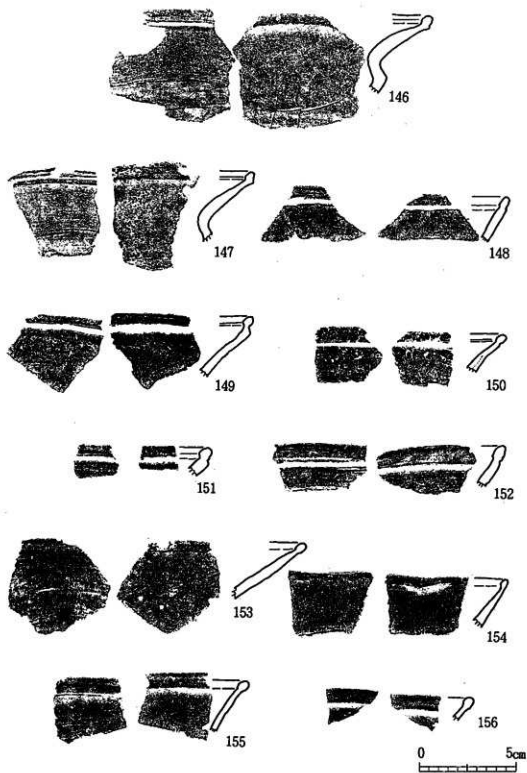
第32圖 出土土器実測圖(18)



第33圖 出土土器実測圖(19)



第34圖 出土土器実測圖(20)



第35圖 出土土器與測圖(21)

127は胴部から底部までの土器片である。屈曲部外面に稜を持つ。外面は丁寧なナデ調整であるが、内面は荒いヨコナデである。129,136,137,141は荒いナデ調整である。130,144は器面調整が荒く外面に凹凸が観察される。130は底に粘土塊が付着している。143はハケ目状の仕上げである。外面に多量のススが付着する。

浅鉢形土器（第35図～第37図）

精製浅鉢（146・147・150・154～156・158・160・163～166）と粗製浅鉢（148・149・151～153・157・159・161・162・167・168）の両方が存在するようである。

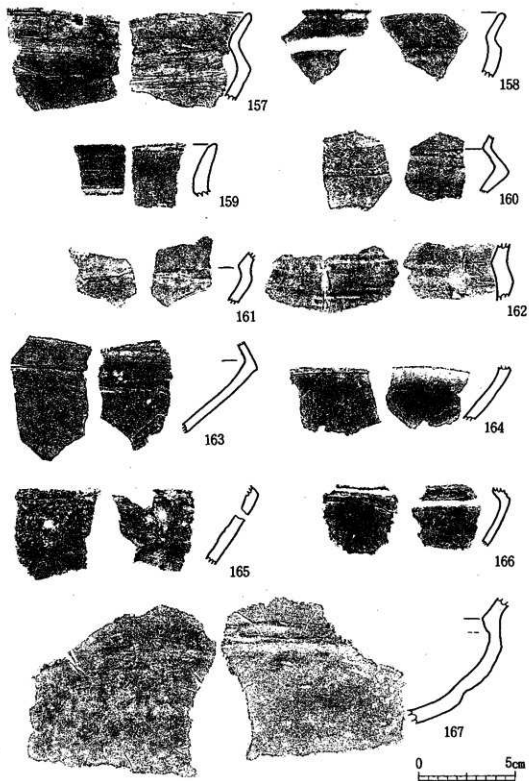
146,147は胴部で稜を持ち肩部が短く「く」字状に折れ、口縁部は大きく外反し口縁端部が立ち上がるものである。口縁端部外面に沈線を施す。いずれも内外面ともにミガキ調整である。147は口唇部に2条の沈線を施すようであるが、浅く明瞭でない。148は内外面に沈線を施すものである。内外面とも丁寧なナデ仕上げである。149は口縁端部が断面玉縁状となるものである。外面は丁寧なヨコナデであるが、内面はミガキ調整である。

150～152は口縁端部外面に沈線を施すものである。150は内外面ミガキ調整であるが、若干摩滅している。淡茶白色である。151は外面はナデ調整で、内面は丁寧なナデ調整である。152は内外面とも丁寧なナデ調整である。153は外面はハケ目状の荒い調整を施し、内面は丁寧なナデを調整を施すものである。154は外反する口縁端部を折り返すものである。内外面ともミガキ調整であるが、外面はやや摩滅している。155,156は断面玉縁状となるものである。内外面ともミガキ調整である。

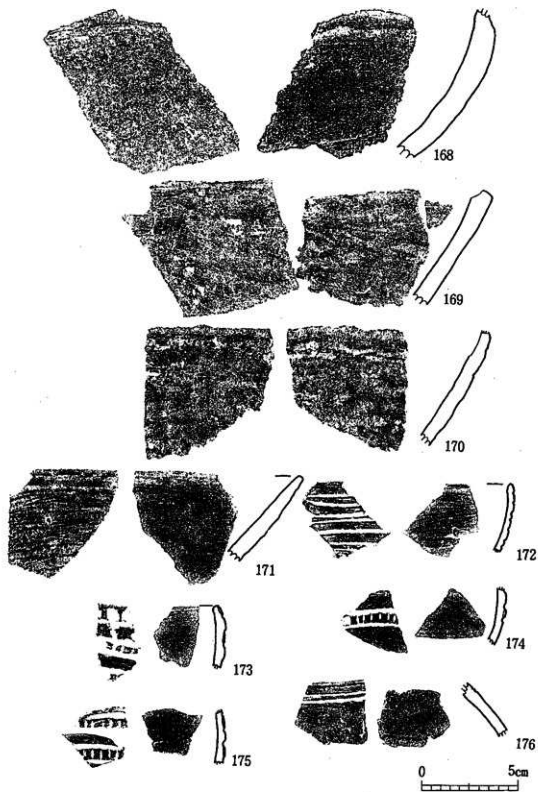
157,158は胴部に稜を持ち頸部で屈曲し、若干外反する口縁となるものである。157は内面はヘラナデで、外面はミガキ調整である。外面にはススが付着する。158は内外面ともミガキ調整である。159は外反する口縁部で内外面ともナデ調整である。160は胴部に明瞭な稜を持つ。内外面ともミガキ調整である。161は内外面とも丁寧なナデ調整である。色調は淡黄色である。162は内外面ともナデ調整で若干摩滅している。163は内外面ともミガキ調整で、外面の稜は明瞭である。164は内外面ともミガキ調整である。165は円孔を穿つものである。内外面とも摩滅しているが、外面にミガキ調整が部分的に観察できる。166は口縁部近くの胴部片で肩部に沈線を施すものである。内外面ともミガキ調整である。色調は淡灰色である。

167は内面に明瞭な稜を持つものである。外面は部分的に荒いミガキ調整であるが、基本的に内外面ともナデ調整である。内外面ともススが付着する。168は内外面ともナデ調整である。内面の調整は丁寧である。

169,170は口縁部が若干内湾気味に立ち上がるもので、端部は剥落している。169は内面は摩滅しているが、部分的に丁寧な調整を観察できる。外面は荒いナデ調整で、ススが付着している。170は外面はナデ調整である。内面は摩滅している。色調は黄褐色である。171は直線状に立ち上がるものである。外面は荒いナデ調整であるが、内面はミガキ調整である。



第38圖 出土土器実測圖(22)



第37图 出土器类图(23)

マリ形土器 (第37図)

172,173は内湾しながら立ち上がる口縁で、いずれも内外面とも丁寧なミガキ調整である。172は外面に不規則に数条の沈線を施すものである。173は沈線を数条巡らし、口唇部と沈線によって生じた隆起部に規則性をもって刻目を施す。174,175も同様に隆起部に刻目を施すものである。176は頸部近くに沈線を数条施すものである。

3出土石器 (第38図～第39図)

磨製石斧 (第38図の178,181,184)

178,181は磨製石斧と思われるものであるが179は厚減著しく不安である。いずれもゆるい外湾刃を呈しする。178は厚さが薄い。184は有肩磨製石斧に属すると思われるものである。打製剥離によって整形し研磨するものであるが、部分的に調整剥離痕が観察される。

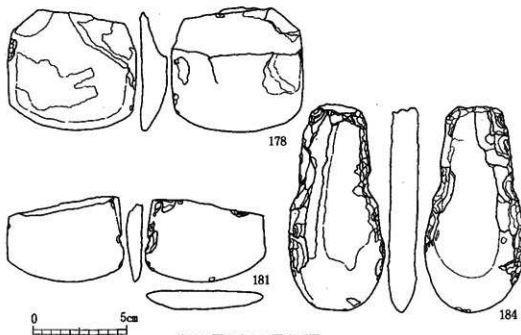
ノミ状石製品 (第39図の191～194)

断面形がノミ状になっているものである。いずれも小型のもので、丁寧に研磨しているが刃部を形成しない。

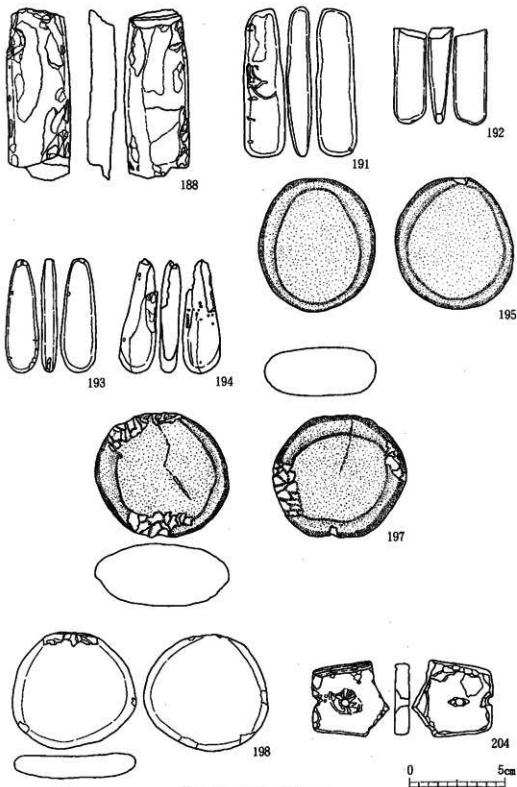
磨石 (第39図の195,197,198)

いずれも楕円状の円磔を用いており、石材は砂岩である。197,198は磨石として使用するとともに敲石としても使用されたものと思われる。

204は円孔を2ヶ所穿いている石製品で砥石と考えられるものである。上位に沈線を施し、円孔はほぼ直に穿つが周りは厚減著しい。



第38図 出土石器実測図



第 39 圖 出土石器実測圖

まとめにかえて

上田屋敷遺跡では縄文時代早期・晩期の遺物が出土した。縄文時代早期の遺物の出土は希薄であったが、縄文時代晩期は完形に近い接合資料に恵まれた。

縄文時代早期の遺物は押型文土器、貝殻条痕文土器の出土が見られた。押型文土器はいずれも外面に山形の押型文を施文するものである。

縄文時代晩期に該当する入佐式土器、黒川式土器が出土している。入佐式土器の範疇ととらえられるものが主体であり、縄文晩期については入佐式期の単純遺跡であったものと思われる。

深鉢形土器の口縁外面に沈線文様を施すものは少く、ほとんどが沈線文様を施さないようである。精製深鉢は少く、ほとんどが粗製深鉢主体を占め、口縁帯の形成も雑で部分的に口縁部外面に稜をもつ部分とまたない部分がある。

100' は底部近くから緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部がやや開く器形を呈し口縁部は台形状に貼りつけ口縁帯を形成するものである。器形的に相違が観察されるが入佐式土器の範疇としてとらえた。

172,173に代表されるような不規則に沈線を施すもの、沈線によって生じた隆起部に刻目を施すものは熊本県古閑遺跡などに見られる。

今回の調査で主体を占めた遺物は縄文晩期の入佐式土器であった。南九州縄文晩期土器編年においては上代世田式土器→入佐式土器→黒川式土器となっており、上田屋敷遺跡の縄文晩期に関しては入佐式期の遺跡であることが判明した。

写 真 图 版



重機による表土剥ぎ



試掘トレンチ設置状況



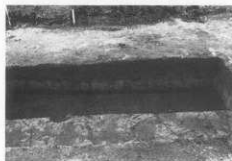
1 トレンチ断面・完掘状況



2 トレンチ断面・完掘状況



3 トレンチ断面・完掘状況



4 トレンチ断面・完掘状況



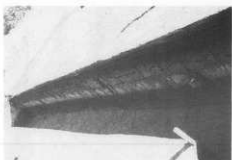
1・2号畦畔断面



1号畦畔断面（西側）



2号蛙湖畔断面(西侧)



3号蛙湖畔断面(西侧)



4号蛙湖畔断面(北侧)



N-2区·M-2区·L-2区发掘状况



J-1区·K-1区遗物出土状况



J-1区·K-1区遗物出土状况



J-1区·K-1区遗物出土状况



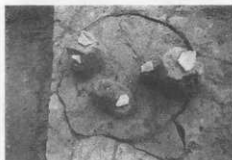
M-2区·L-2区遗物出土状况



M-2区・N-2区VI層遺物出土状況



旧3トレンチ、L-2区遺物出土状況



第1号土壇完掘状況



第2号土壇完掘状況(上から)



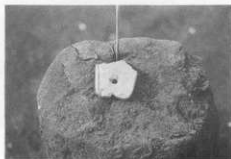
第2号土壇完掘状況(横から)



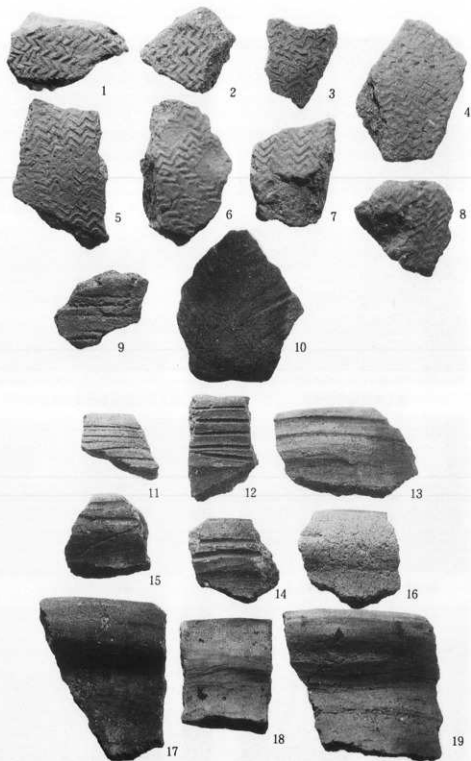
遺物出土状況



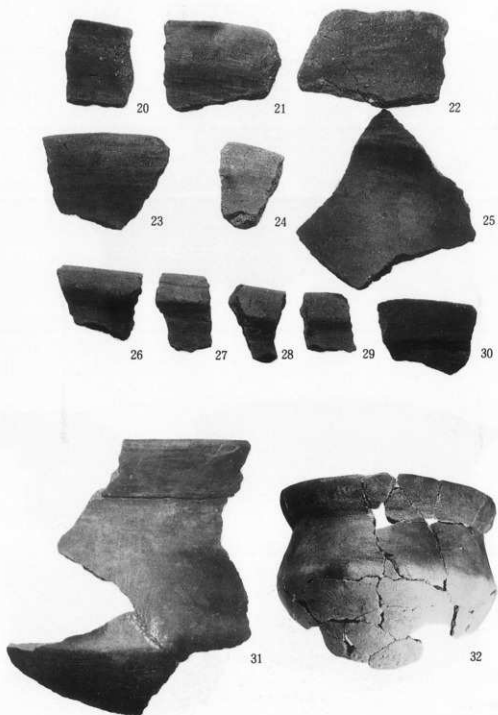
No.100' 出土状況



No.204出土状況



图版 4 出土遺物 (1~19)



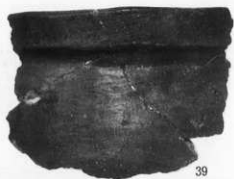
圖版 5 出土遺物 (20~32)



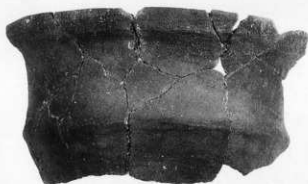
圖版 6 出土遺物 (33~37)



38



39

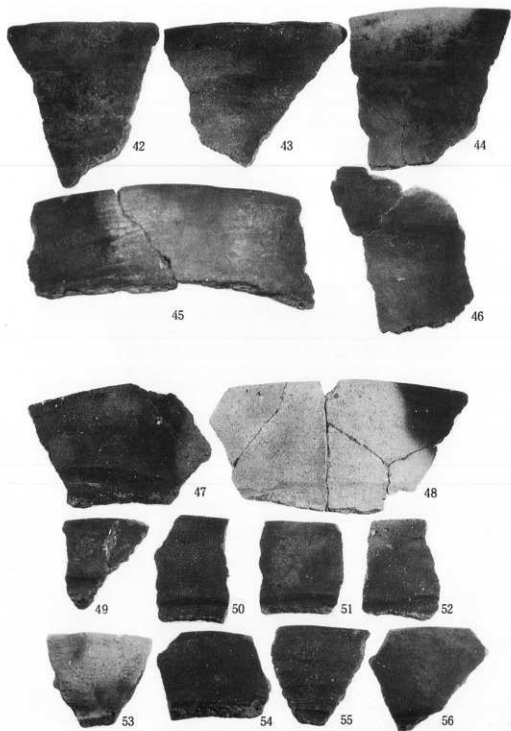


40

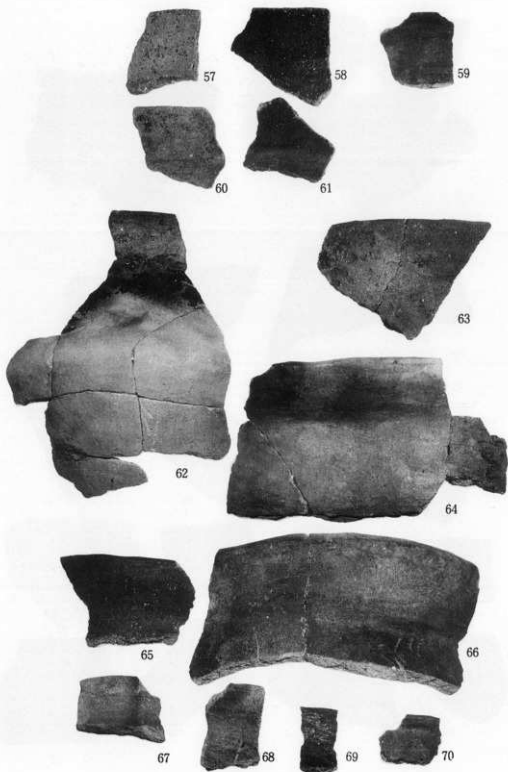


41

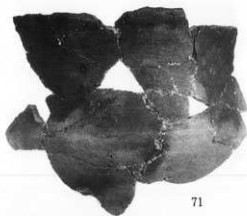
圖版 7 出土遺物 (38~41)



圖版 8 出土遺物 (42~56)



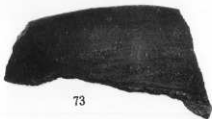
圖版 9 出土遺物 (57~70)



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85

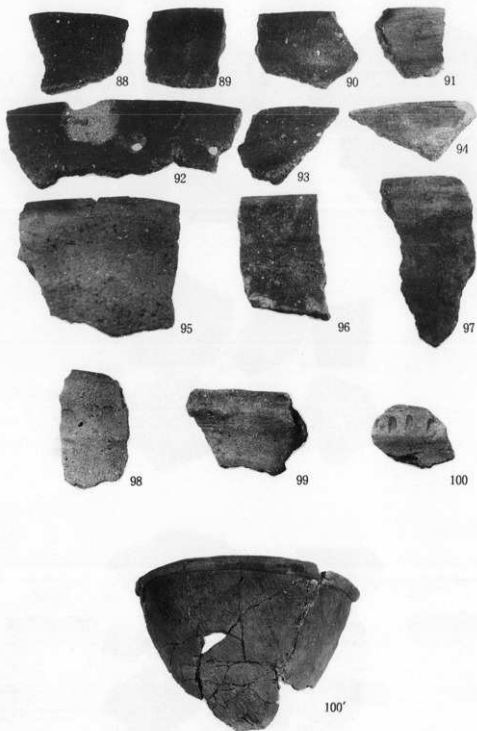


86

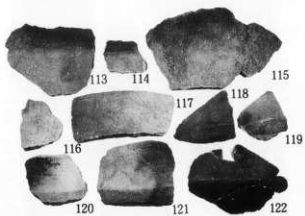
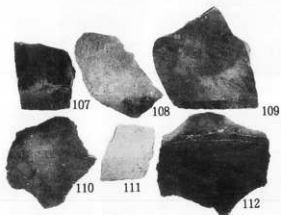
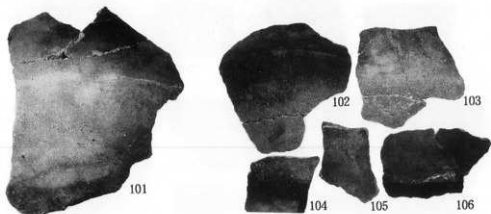


87

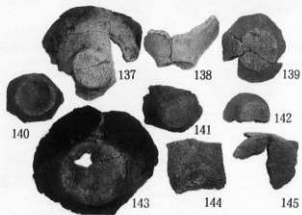
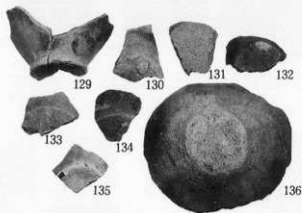
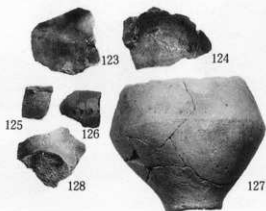
圖版10 出土遺物 (71~87)



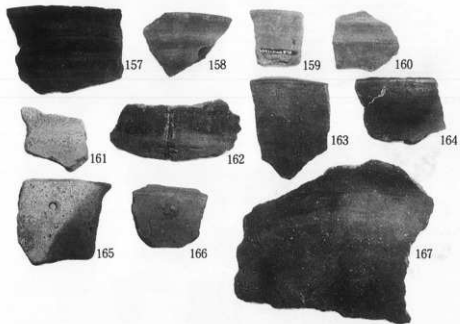
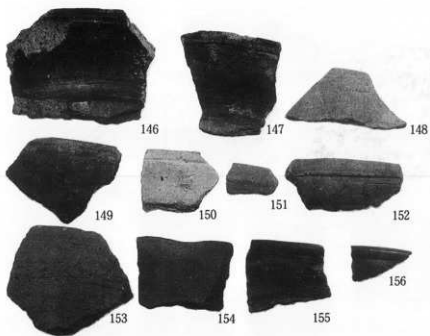
圖版11 出土遺物(88~100')



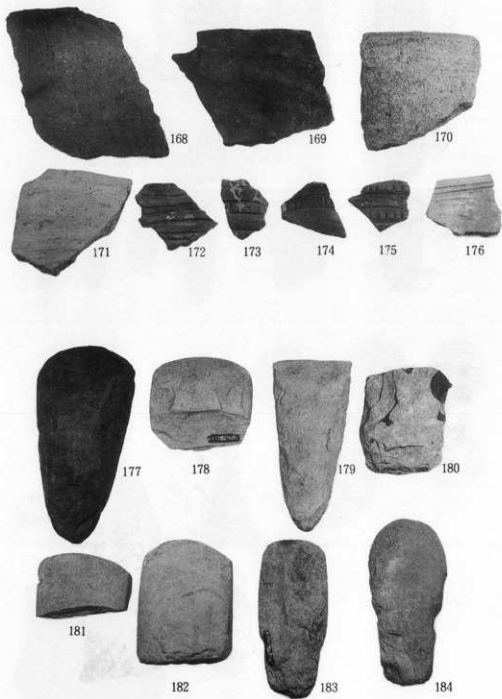
図版12 出土遺物 (101~122)



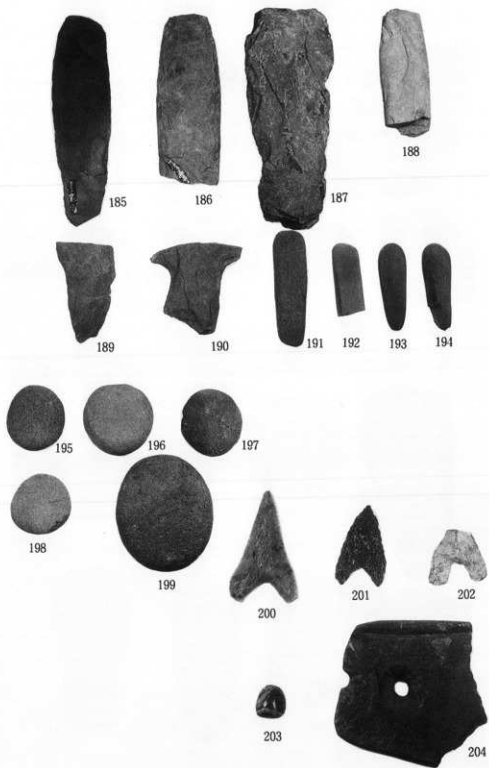
図版13 出土遺物 (123~145)



圖版14 出土遺物 (146~167)



图版15 出土遺物 (168~184)



圖版16 出土遺物 (185~204)

あ と が き

上田屋敷遺跡の発掘調査は、心地よい秋風の吹く10月末に始まり、風の冷たい12月初旬に終了しました。

調査当初、出土遺物が少量であったため、多少の安堵感をもって調査を進めていましたが、調査が進むにつれ、完形に近い土器の多量出土等、限られた時間の中で慌ただしく調査を完了することになりました。

多くの方々からご指導・ご教示を頂きながら、ようやく報告書刊行にまでたどりつくことができました。特に県埋蔵文化財センターの井ノ上秀文氏には、御多忙にもかかわらず、御指導を頂き厚くお礼申し上げます。

なにごふにも浅学のため、多くの誤りを指摘されることになると思いますが、向学の徒に免じ、ご教示頂けたらと願っております。

最後になりましたが、限られた期間のなかで無理をしていただいた作業員の皆さんには、改めて深く感謝を申し上げます。

(御指導を頂いた先生方)

新東晃一 立神次郎 弥栄弘志 中村耕治 宮田栄二 鶴田静彦
清水周作 その他鹿兒島県埋蔵文化財センター職員(敬称略)

(発掘作業員)

春口峯次 山村又男 上迫兼利 春口繁 下山学 中野喜義 春口稔
春口フミエ 春口康子 上迫モミ 水流トシ子 坪田和子 永吉ノリ
吉原シズミ 牛倉セツ子 下山エル 岩田スズエ 宇都幸子 山下ミキ
片村光子 春口ノリ 園田トシ子 安楽えつ子 上田美江子 北村広子
佐藤しづ江 坂元由紀子 樽野次子 見野三千子

(整理作業員)

安楽えつ子 上杉みゆき 北村広子 児玉洋子
佐藤しづ江 坂元由紀子 樽野次子 見野三千子

志布志町埋藏文化財発掘調査報告書 (23)

上 田 屋 敷 遺 跡

発行日 平成 5 年 3 月

発 行 志布志町教育委員会 (鹿児島県曾於郡志布志町志布志2542)

印刷所 志布志印刷有限公司 (鹿児島県曾於郡志布志町安楽1966-2)